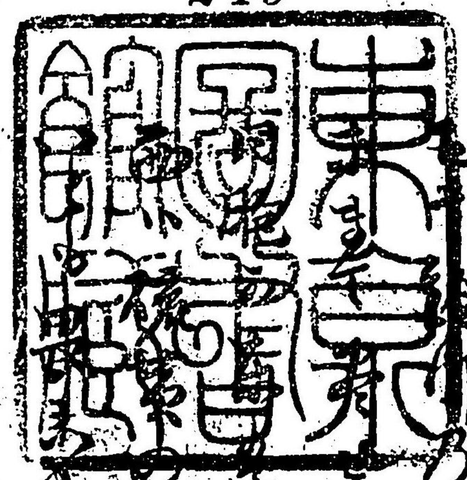
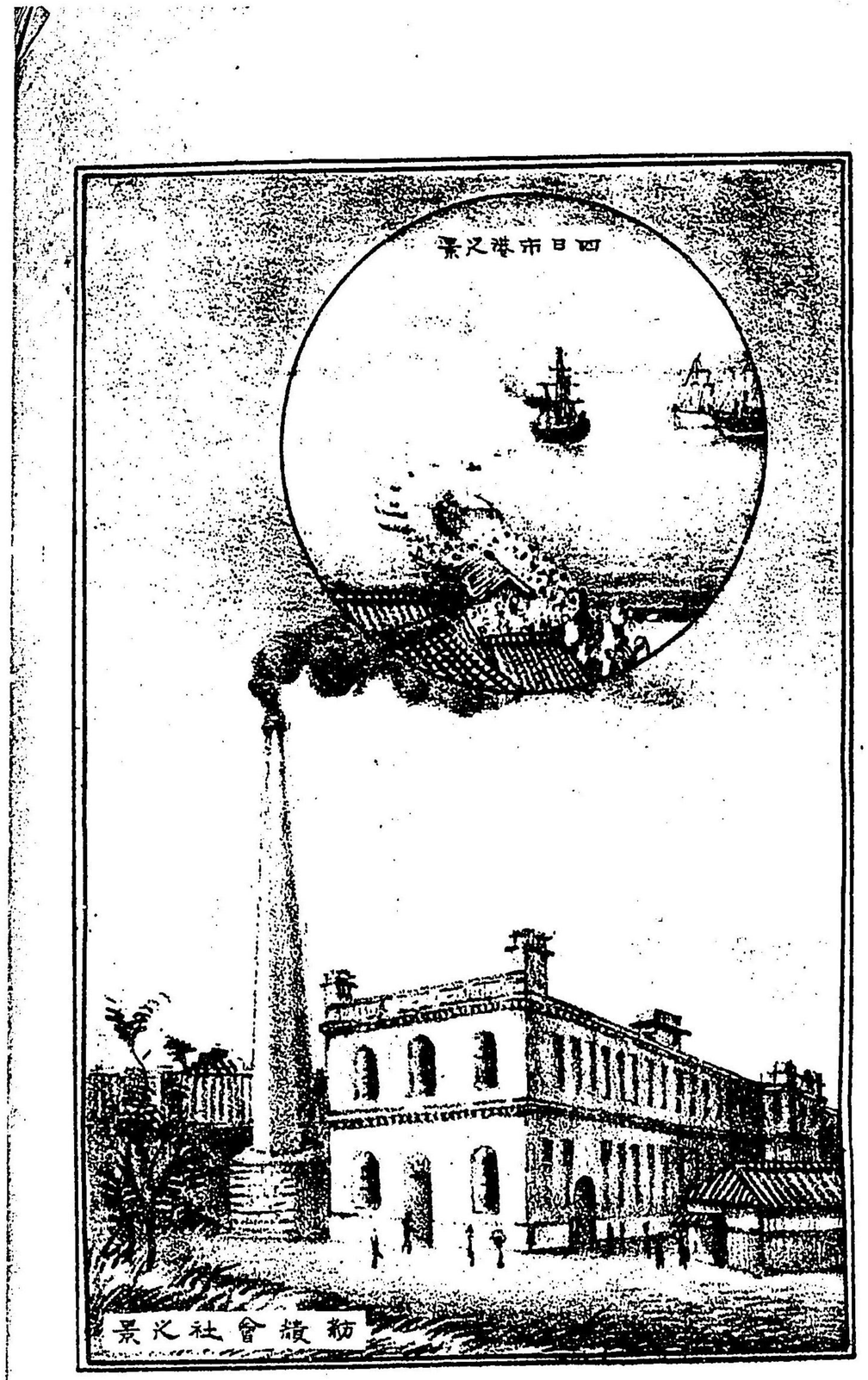
梁
玄
女
為

特20
245
No 2953/23

伊勢土產張家藤之友序



清涼旭日の穀氣と共に
大聖寺乃妻子乃や我の
職席捕乃手畜乃奥より
煙立ち昇乃水面乃靄まで
天祖の御護威をもそ
寄り給する神恵の賜そ清寺清船乃
賜り給を通ひ語ふ事一事に揚さてやハ
ひろ為き能きに此小冊子ふ書墨田乃



新宮ハ巷ニ人世ニ世ニ傳ヘラルヤ
世ニ生ル文ヲ卑ハ俗ハ一ニ便ヲ低ク
世ハ記ス年頃伊勢の印風ハ畫ク
勝徳ヨリ得ル所ニ
明治廿四年三月
伊勢 沼人

東京帝國大學圖書館

伊勢街道

桑名町ヨリ津市マデ十一里余

伊勢街道　桑名町より津市迄

神風の伊勢に鎮座の大廟に詣づる人は東路の　五十有餘の驛次に旅寢の夢を重ねしも　開けし御代の惠みとて　百里の道も只一日

濱田一聲轟々と　走する車の窓よりぞ　彼の宿々を眺め來て　最早熱田と夕暮に　宮の驛にぞ着にける　宮は名高き船付き場　日毎に多く滊船にて　渡り上れば四日市

四日市町

海の沙嘴海中に斗出して其の南を扼し尾張三河の山々は海雲綜渺の中に隱見し波戸は海水を控へて阜頭を爲す滊船帆舟は港頭に輻輳し諸製造所の煙突は林立して相望み各會社の彩旗は空中に翩翻たり貨物の往來頻繁にして車馬旁午せり是れ此港に上陸せし者の一瞥して知る所なり蓋し當港は日本帝國東の海岸中著名なる良港の一にして恰かも東西二京の中間に位するが故に横濱港へは日々滊船の往復

あり大坂港へは毎月四回の定期回漕の瀛船あり熱田聲崎神社へは二艘の小瀛船ありて日夜往復の絶へ間もなし年中寄港の瀛船の惣數は六百餘隻に上り近來米穀の特別輸出港と指定せられけり加之關西鐵道會社が敷設に係る鐵道は當港倉前より起り東海道に添ひて加太越を伊洲に出て江洲草津に鐵路に連接し其の支線は鈴山より岐かれて津に達し夫より參宮鐵道に接續するの豫定にて本年中には大抵竣工すべけれは四日市の未來は實に閑熱の都會とこそはなりぬべし去れ共頭を回らして過去を回想すれば當港は維新前までは水田茫々として蘆岸を埋めし寥々たる海隈なりしを明治六年稲葉三右衛門氏見る所ありて草莽を開き海濱の水田凡一萬六千餘坪を開拓して波止を築きしより大に船舶碇泊の便を與へ頓に舊觀を改めて今日の盛榮とこそはなりにけり當町は人口壹萬餘商業及製造の都邑としては縣下第一に位する所にして銀行商社軒を並べ精白米紡織製油煉石の工場

關西鐵道

四日市ノ未來

四日市ノ過去

人口

商社工場

は器械運轉の聲殷々として晝夜を分たず

高砂町

皐頭にある町を高砂町稲葉町と稱し其間に運河を穿ち之に架するに二條の橋を以てす高砂橋といひ開榮橋といふ開榮橋より西行して藏町中町を過ぎ十字街頭に至る是の南北に走る道は東海道の官道なり南を南町といひ北を北町といふ商戸軒を列べ娼館其間にありて四日市中尤も繁華の市街なり今より十有餘年前瀛船の便なき時は驛馬乘輿に道路を警護して往來する小大名も合羽行李の手荷物にて旅行する膝栗毛連も皆悠々として是より北に向ひて五十三驛路程の長き街路の難を歎せしならん此の邊旅店多く山田屋八百善美濃喜等を其の最なるものとす

稲葉町

藏町

中町

南町

北町

旅店ノ評判

山田屋

山田屋は南町にあり旅人定宿を營み併せて日本郵船會社船宿の取次ぎ及び熱田神社其他諸港への乘船客に周旋をなし各港の瀛船問屋及び各地の同業者へ廣く交際を結び日增に來客の多きを加ふ殊

美濃喜

八百善

に客室清潔にして料理は精鮮に且つ低廉を旨として諸事取扱を親切にす旅客に取りては便利至極と云ふべし加之のみならず當家は市街の中央にありて諸事に便利なるが故來客夥しく繁榮日に增すとかや水路の客も陸行の客も當四日市を通行する者は當家に止宿するこそ都合よからめ

四日市町にて商人宿の尤も古くして且つ大なるものは南町美濃喜を以て第一とす宿泊の料安價にして用意周到なる開店の昔より變る事なしと云ふ玆に此の家の特異と云ふは諸事皆客の指圖を待ち客をして決して無益の金錢を浪費せしめずとなり故に苟も商人の當地を過ぎるもの皆爭ひて此の家に泊し爲めに門前市をなすと云ふ

積善亭通稱八百善は堅町にあり古くより料理仕出しを營業し兼ねて旅人の宿泊を營む元來割烹を主とする事なれば其調理美味にし

吉高屋

て凡そ當町に於きて懇親會等の場所は多くは皆此の家に於きてすと云ふ以て此の家の他に比類なきを知るべし而して其の積善亭と云へる事は津藩碩儒捌堂先生の名けしものにして今尚其の扁額を掲ぐと云ふ

濱町に其名も世上に吉高屋とて當町無双の旅人宿漁船問屋なれば漁船の周旋は更なり上り下りの行客の休泊と人宿を無業し便利至極の旅店なり當店の周旋する日本郵船會社の船賃は在表の如し

參宮							
午前八時三十分	熱田	大野	上等	中等	下等	四日市	横濱
午後二時	熱田	大野	卅五錢	卅五錢	十五錢	四日市	横濱

漁船							
正午十二時	津	神社	三十錢	二十錢	十五錢	卅五錢	卅五錢

問漁船							
上等	四圓五十錢	往復	八圓	中等	三圓	往復	五圓五十錢
下等	一圓五十錢	但シ日本食事		西洋食御好ミノ方ハ一日分上等二圓中等一圓下等五十錢ヲ中請候			

濱町紡績場

縣社諏訪神社

伊藤小左衛門ノ碑

伊藤小左衛門ノ小傳

人々各好む所はあれど却奔退飛する電信柱をば嘗れる玻璃窓の中にて數ふるよりは休閑かに氣爽かに甲板の上を濶歩して水天一碧郭宗の景色を弄すること妙趣實に無量ならずや

濱町に紡績場あり社長は八卷道成氏支配人は伊藤傳七氏なり資本金は五拾余万圓明治二拾年の開業にして近頃更に五拾余万圓の資金を增募し一層手廣く事業を營むと云ふ

縣社諏訪神社は祭神は事代主命建御名方命にして建仁年中信濃國諏訪上下二社を勧請する所神殿に田原藤太秀卿の甲を藏す

諏訪神社の境域に伊藤小左衛門の碑あり高一丈二尺巾四尺八寸家額は大藏大臣松方伯にして撰文は重野安繹氏なり

伊藤小左衛門は三重郡室山村の人家世々農を業とし傍ら味噌醤油を醸く小左衛門幼にして英敏長して勤苦業に勉む故に釀造精良世に賞せられ豆を用ふる年に三千石の多きに至る領主松平侯擧て用

始メテ製絲製茶ニ志ス

北勢ノ製茶ノ盛ナル原

心ヲ製絲ニ苦ム

達となし後累進代官株上席となる嘗て一書を閲し繭糸茶葉の西洋諸國に需用せらるゝことの多額なるを知り此の業を以て國益を起さんことを圖り地を栢き茶種を播く墓府横濱に工市場を開くに及び即ち製茶を横濱に輸し利を收むる頗る多し近邑之を見て皆爭ひて茶を栽培す北勢の製茶今日の盛を致すものは蓋し小左衛門氏に始まる也文久二年繭糸の業を起し工女二人を傭ひ之を試む明治七年十人繰の器械を設け翌年富岡製糸器械に摸造して糸を製し之を横濱に輸す糸質下惡にして賣れず大に損失を蒙る小左衛門舊然自ら富岡に躍り其の製法を習ひ又其姪女二人を遣りて工女となし蒸濂器械を据へ付けて努力製絲に從事す是れより其業大に進歩し盛に外商の讃賞を受け其の價富岡製絲に一歩を讓らざるに至る縣廳大に其の篤志を賞し特に褒狀を賜ふ時明治十年なり以來内外博覽會共進會等に出品して毎に賞牌若くは褒狀を受く明治十二年五月

小左衛門氏沒ス

二十一日病を以て沒す享年六十二小左衛門勤儉國益を以て自ら任ずる終始一の如く百折して撓まず性施與を好み人の急に赴く家睦く數子產を全しくして皆業に勉む嗚乎事業道德共に一世に卓然たる小左衛門氏の如きは眞に稀れなりと云ふべし

室山製糸場

四日市町の近傍四鄉村大字室山村に製絲場あり巨大なる蒸瀘器械を以て盛に繭絲を製す其一歲間の產出高無慮五千餘斤に至る是れ乎御實業社會の英雄漢なる伊藤小左衛門氏が百折千挫の後に創設せし所にして近國無二の大工場たり此道に志ある者事を抗げて一覽を求むべし

川島紡績場

川島村に三重紡績所あり年々の產額壹万二千餘貫世に川島絲と稱して聲價高く販路廣し

孤野湯山温泉

四日市の西四里に孤野あり土方氏の舊城下にして人口三千余の小市街なり其の近傍に湯山温泉あり世に孤野の鹿湯と稱し脚氣其他諸病

三重縣ノ製茶

に特効あれば浴客常に多く殊に夏日は山色の幽靜深邃にして清涼なるが故に避暑の騷客の杖を曳く者多し因に說く孤野近傍の茶は世に謂はゆる孤野茶にして清甘の芳味頗る宇治茶に肖たり蓋し三重縣は日本帝國內製茶地方十縣の其一にして產額の多量なるは靜岡に次ぎて第二の地にあり一志郡の川上茶飯高郡の川俣茶など有名のもの多々ある中に天俣地味の塩梅南勢よりも北勢に良茗を出し就中孤野近傍の如き玉露の上品を製出し獨り美を縣內に專らにする所なり

以上四日市町を記するの序思はずも筆走りて其の近鄉に及びしが更に北方四里の路程を記して桑名に入り然る後復ひ四日市に還りて徐かに南せん北詢と河原町との間に架する橋あり之を三瀧橋といふ蓋し川によりて其名を得たるなり河原町の盡頭と濱の一色村との間に海藏川あり架げたる小橋を海藏橋と稱す羽津八幡の二村も早打過ぎて富田の宿に着きぬれば是れ乎昔しより名物燒蛤とて蛤を松毬にて

三瀧橋

海藏橋

富田

名物焼蛤

朝明川

小向村

萬古焼ノ由來

炙り旅客に供せし所にして其昔し東海道の榮へし頃には上り下りの行々が無類の珍味と賞嘆の餘り焼きたての熱きを喰ひて唇を焦し富田名物なりと一笑して過ぎし彌次喜多連も多かりしか（はまくりの焼かれてかくやはゝとゝぎす）其角か名句も今や寂絶〳〵にて昔を懐ふに過ぎざるのみ

富田を後に見なしつゝ穰々として登る豊田を過き古松道を爽み民家の其の間にあるは松寺にてはの〳〵と白砂の見ゆるは朝明川なり此川を打渡り柿村越をば小向村是れそ卽伊勢萬古の根本の産地なりいで萬古焼の由來の概略を語らん

其の昔し德川の初世に江戸に東萬古と稱せる陶工ありしが寄巧にして風韻高かりければ名流の賞讃する所となれり東萬古に三人の弟子あり一人は古山と稱し早く沒し他の一人は伊勢國飯野郡射和に來りて射和萬古と稱し殘る一人は安濃郡阿漕に來りて安東焼を

萬古焼中興ノ祖ハ有色

出せり然るに時の政府は猜疑の心深く安東焼をは安く東を焼くとの文字にして明に叛亂の意を宮するものなりとて其の爐を毀ち其の業を禁絶したり然るに射和萬古も如何なしけん其の業を廢して遂に萬古一派の陶工跡を世に絶つに至りけり之より久しき後の事にてありし當小向村に有節〻稱する技巧の陶工あり東萬古が秘技なる陶器の內側に彫彩を施すの術を案じ出し（木の型にて之を組合せて其の外面に陶土を塗りカワキたる後型を組はゞきて取り出す也）ければ忽ち非常の喝采を博し領主松平侯大に之を賞して特別の保護を與へたり之より其の業漸々榮へ精巧の品隨ひて出で茲に伊勢萬古の中興の偉功を擧げにけり維新の後に至り萬古焼愈益盛大に赴き今は桑名四日市より津に迄及ぼし遂に當國特有の物産として其名を海外に馳するに至りき就中初代有節氏が子孫は今に祖號を傳へて此の業の本舗たり

町屋川

小向村を過ぎ行けば一直線の道なれば縄生の名も空しからず縣下第二と稱へなす町屋川の長橋を打渡り行くて程なく福江町之れ即桑名の盡頭なり

桑名町

桑名町

木曾川浩々として信濃より來り美濃に發する揖斐川と相會して復た數條に分かれ長島を貫きて伊勢海の北の盡頭に注入す揖斐川の海に注ぐ所に繁閑なる一港あり之れぞ即桑名港にして尾洲熱田より此の港までは海上七里昔しより此水程を稱じて間遠の渡しとこそは聞こへける唯艪の力のみにて七里の水路を往來するとなれば船客無聊に堪へ兼ねて嗚呼間遠ひかなの嘆聲を發するも多かりつらん扨は其の名の起りし所因も夫れ此にある歟と想像せらるゝなり其の昔し德川幕府の頃には關西諸國の大小名が參勤交代の其折に必ず此處を經しことなれば當時繁華を極めし狀況當國第一にてありしが今や滝車滝船の便あれば昔しに比すれば往來も著しく減じて復た往日の觀なきも當港と熱田港との間には毎日二回滝船の往復あれば熱田を發し僅かに三時を經ぬれば一聲の滝笛と共に桑名港の川口に着しぬべし宮驛より陸路前賀須に至り木曾川の渡しを越へて來るも又津島より長島に來りしものも亦た濃洲大垣より小蒸氣船に搭して揖斐川を降り來るも共に全じく此の川口に着するなり

抑も桑名は當國北の盡頭なる都邑にして幕世の頃には昔に聞ゑし松平越中守が奥洲白川より遷りて居城となしたる所なり市街の數は重もなるもの四十餘人口は壹万二千餘にして郡役所警察署治安裁判所出張所病院等あり市街の中にて尤も繁華なるは船馬本町三崎通等なり船馬本町邊には多くの娼家ありて絃歌の聲堪ゆる間もなし蓋し當町は北美濃尾張に近くして交通便利に又四日市港咫尺の地にあれば自ら百貨の輻輳するのみならず殿町に大坂當島に次ぎて關左に有名

船馬

本町

三崎通

米商會社

當町ノ一大患

時雨蛤

なる米商會社在豪階を闢はす商客の遠近より群集して自ら土地繁榮の元素とはなることとなり唯土地低濕にして水性の重濁なる堀抜井戸を使用せさるを得ざるのみならず時にかわ〳〵の出みずより非常の大災を被ることあるは當町の一大患なり思ふに數年の後に至り木曾川改鑿の大工事竣功の際には年來の水患除きて利用隨ひて益々興らん歟

伊勢著名の國產時雨蛤の本舗貝谷新左衛門は桑名本町三崎通角にあり時雨蛤は當家七世の祖先か始めて製法を發明してより爾來名聲漸く遠近に輝き販路愈開けて本縣特有の名產とはなれり近來賣捌所を名古屋本町十一丁目に設け又支店を四日市の濱町に開き盛に四方に販賣す如聞去る明治十六年水產博覽會開設の際製法宜を得て風味佳良名產の稱に負かざる廉を以て當時の農商務卿西卿伯の印を捺せる菊紋の褒狀を辱くせしと實に世に類なき面目にして

爾後年々宮內省より調達を命せられ其名を高く雲の上に馳せること偏に製法熟練の功に因るのみ蓋し拾余年前當家主人に鏈詰にせば腐敗の憂なからんと勸むるありけるに主人は木製曲け物箱に詰めて盛夏に腐る樣なる未熟の製法はなさゞればとて勸めに應せざりしといな（客の需によりては鏈詰にすと云ふ）是も卽當家獨得の妙にして濫製者の枝葉の企及すべからざる所にゞある頃ろ〳〵亞細亞大博覽會に出品せりと聞けば他日更に光榮を荷はんこと期して待つべきも也

船津屋

船場にありて屋舍の宏壯と眺望の絕佳とを以て稱せらるゝを近水樓といふ先年有栖川宮此に宿泊せられ其の風景を愛でゝ眺憩樓の三字を書して與へ玉へり此の樓上より東を見れば城趾の石垣は川に臨み其の下には參遠より來る艅艎數艘となく輻輳し帆檣林を爲し北は水を隔てゝ古松の間に人煙を認むるは長嶋の村なり多度山は

峨々として翠色天を磨して西方に横たわり白帆風を孕み柔櫓の聲遠きは太田大垣等より來る船なるべし樓下には住吉の祠壽滿山の風景を見るべく四時の觀望皆宜しければ眺憩の名も亦空しからず

と云ふべし

桑名神社

式内桑名神社及春日神社は宮通にありて祠宇壯麗なり春日祠前に左右大臣の像を安置す桑名神社の祭禮は方俗石採り祭と稱し毎年七月之を行ふ勇烈壯快にして全市狂奔す蓋し是れ松平祖候か士氣を鼓舞する一端に供せ〻所なり

春日神社

本統寺

本統寺は寺町にあり東本願寺派にして桑名御坊と稱す結構莊嚴當町の第一なり

立坂神社

式内立坂神社は矢田磧にあり矢田八幡と稱す之を天武天皇行宮の跡となすは非なり當町の西に接する本願寺村に菊の井と稱する清泉あり此の地こそ即天皇の舊趾にして今鍋屋町にある天武天皇の祠は天

和年中此處より遷り祠れるものとかや

桑名ノ名産

桑名の名産と稱するは白魚蛤に刃物類なり白魚は木曾川揖斐川の注口淡水鹹水の相交はる所に生じ春時に之を漁す芭蕉の句に（白魚や水より白き事一寸）と蛤は佃煮となし時雨蛤と稱す初冬頃より製造するを以て時雨の名あり刀刃類は桑名村正の餘裔か今に存して鍛造する所にして多く産するは小刀鋏刀の類なりといふ

多度山

多度山は郡の西部美濃の境上にあり桑名を去ること三里山中古木鬱蒼して自ら山谷幽深なり

瀑布

多度川源を此に發す一瀑布をなすものあり多度瀧〻稱す夏日來遊する者多し

縣社多度神社

山上に縣社多度神社を置く祭神は天津彦根命なり傍に一目連の祠あり飛傳放光し玉ふにより神祠に扉なしといふ俗傳に一目の龍にして大風暴雨を發して飛行するの威靈あり〻故に遠近の農民旱魃の時には遠きを厭はず來りて靈を祈るなり

長嶋

長島は揖斐川を隔てゝ桑名港に對す周圍は皆水にして土地低濕なれば時々水害の患有され共要害の地なれば昔し天正の頃淵川左近の將監一益が織田の幕下に參して預り領せし所なりさるに本願寺か武威を輝せる折には桑名の顯證寺か領に歸して織田としのぎを削る戰をなしけるとかや

香取市

香取村は多度の北にあり香取川に傍ひて家す美濃尾張に接近し且舟揖の便あれば自ら小市街の体を爲し近郷の者此處に來りて貨物を交易す之を香取市といふ

以上四日市及桑名両町を記し終れり今は乃ち四日市より南して徐ろに津市に向はん

日永

追分へ半里

四日市町を後になし　歩めば程なく日永村　村に名高き名産は　住へる人の生業に　造り出せる團扇にて　日永團扇と名も高く　旅客に販ぐ店多し　多き旅人が長旅の　足の疲れを休んと　憩ふ茶店に

名物團扇

追分

神戸へ一里廿丁

大鳥居

高岡川

神戸町

白子町へ一里二十二丁

出す餅は　これぞ日永の土餅と　音に聞へし名物の　變らぬ味を賞めたたへ　歩む向ふに大鳥居　こゝはなに負ふ西京と　伊勢大廟の參道を　右左に分つ濕分や　右なる道はこれぞなん　東海道の本路にて　小古曾の村や石藥師　庄野龜山諸驛を經て　關驛までは六里の余

當國參宮街道に鳥居を建つるは近世の習俗なり桑名渡口鈴鹿郡關驛及び本邑三所に設け建つるなり他國にも此の類あり

左は卽ち參宮道　内部の川を打ち渡り　いつしか足の急がれて　早や高岡の橋の下　下を流るる鈴鹿川　岸岡山を右に見て　歩めば程なく神戸町

神戸町

神戸は本多氏の舊城下にして入口より四五丁にして小川あり木橋を架す此の處より街道二つに分る左は參宮街道にして右は東海道の間

道なり此の街左に神館明神あり舊城内に飯野神社あり龍光寺林光寺は寺の尤も大なるものなり林光寺は本尊千手觀音にして伊勢順禮の七番なり

林光寺

かな井山木の間飛來るほたる火の野間の林に光とぞまる

市街繁賑商賈軒を並べ旅店多くあり内田屋三河屋等尤も大なり

三河屋

三河屋は萱町大橋の北詰にあり古き旅店にして座敷清潔客人を接遇すること叮嚀にして宿料極めて安價なれば宿を投ずるの旅客多しと云ふ

内田屋

内田屋は當駅の南端にあり旅客を待遇すること親切にして併かも其の調理美味安料なれば日々多くの旅人が足を此の家に留むるなり

若松

若松は神戸の東南一里許にあり民家海濱に傍ふて居をなす稍繁盛なる港なり

玉垣

玉垣村は神戸白子両町の中間にあり正眞寺の表に美麗なる鳳凰と芍藥花との彫刻わり

矢橋

矢橋村は神戸町の南五丁にあり村の南に森ありて俗に鎌倉權五郎の墓と云ふ又御池と稱するもの僅に遺れり路傍にも權五郎の墓云々の石榜を建つ然れども是れ恐くは方俗の訛傳ならん斯る誤を傳ふるに至りしは御池に住む魚鼈の各一眼なると同名人此の地に居住したるに依るならんか

神戸町は其の昔し本多氏の城下とて商賣繁昌土地賑ひ軒を並ぶる町々を後に見なして行く道の早や玉垣の村越へて歩めば程なく江島村此處は造酒の名所とて萱登ゆる酒造家の一出す酒類澤なれど酩酒杉の井其名こそ殊に世間に高かりける是れより街道海に沿ひ綠の松や白波の眺めも最ど心地よく松聲怒濤と相應じ鼓打つなる鼓浦浦の眺めは眞帆片帆艫を漕ぐ音や漁

酩酒杉ノ井ハ杉本源四郎氏ノ醸造スル所ニシテ其名世ニ高シ

鼓ガ浦

名産染形紙

不斷櫻

白子町

上野へ一里三十一丁

若宮八幡

青龍寺

子安觀音

人の　歌ぞかすかに聞ゆめり　續く白子はこゝぞなん　奄藝河曲の両郡を　管轄なせる郡役所　所在の地とて両側に　軒を並べし商店と　共に榮ゆる町ぞかし　土地の名産形紙やうき繪の形は諸共に其名世間にいゝ高し　續く寺家村中程の　右に聳ゆる伽藍こそ　其の名も高き觀音寺　寺に詣づる人々は　春夏秋冬絶へ間なく　咲き香ふなる櫻花　不斷櫻と名も高し

白子町

白子町は舊と白子村寺家村江嶋村の総稱にして人口　伊勢海に瀕する小港なり商家櫛比し殊に富豪多く船積問屋夥し當町及び其の近傍諸村には造酒家多く醡酒を他府縣に輸出す左方の松森に若宮八幡宮を鎮座す少しく進めば右方の森に大賓天皇の社を座し素盞鳥尊を祭るそれに對する高田派青龍寺あり寺内にまゝ櫻あり白子山觀音寺は街道の右側にあり眞言宗にして本尊白衣觀世音菩薩方俗子安觀音と稱して新人多し聖武天皇勅願天平勝寶年中淡海公の建立なりと云ふ伊勢順礼の第十六番なり

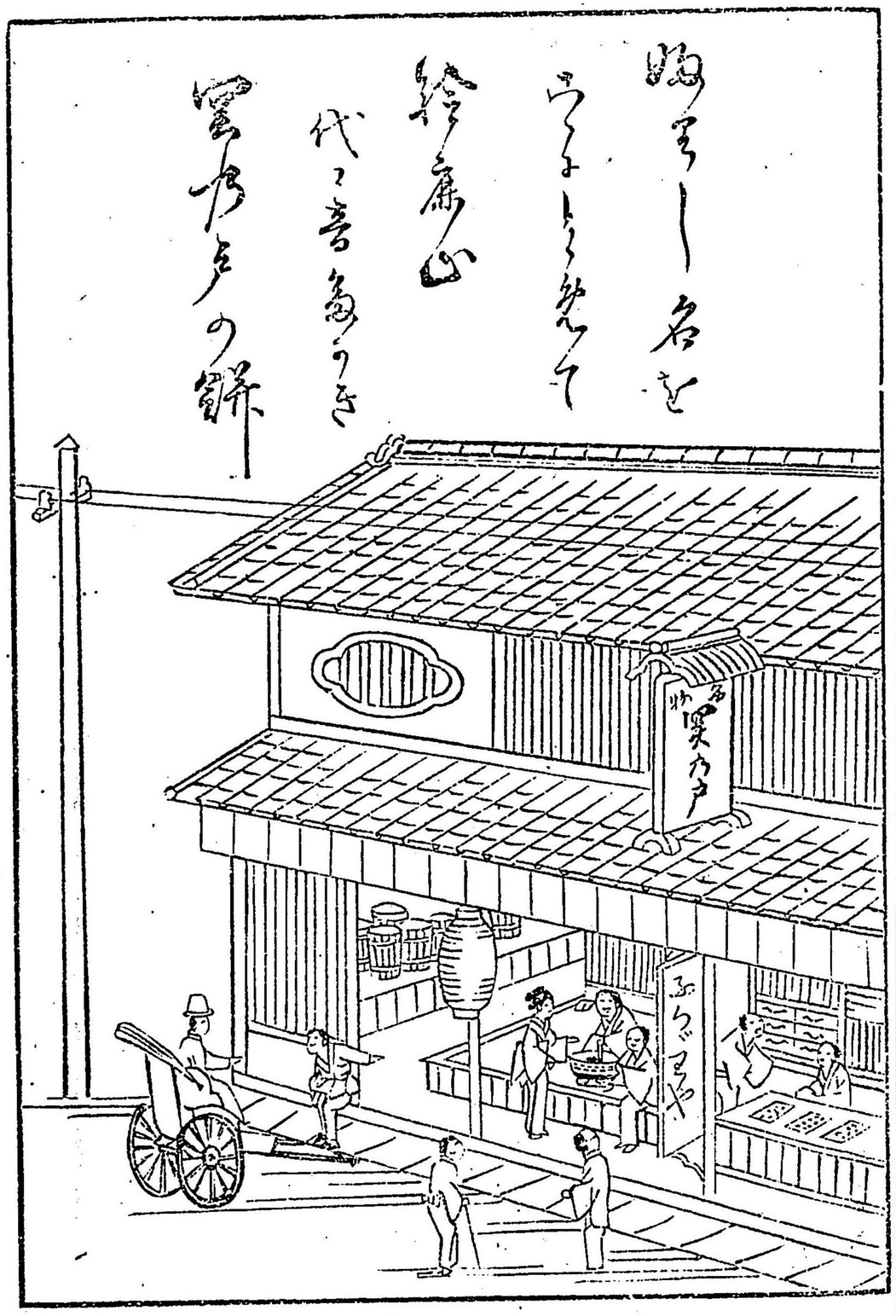
もらさじと立つる佛の誓ひてつゞみが浦になる涙の音

門内右の方に鐘櫻方丈庫裡等あり、本堂は正面にあり、本堂の右に、秋葉權現、金毘羅權現、富士權現、天神祠、熊野權現、神明、木立明神等あり、又寺内に不斷櫻あり、四季花を開く、傳へ云ふ此の寺、いつの頃にか回録にかゝる、其の灰の中より櫻一株を生ず、稱德天皇の叡聞に達し南庭に植らる、一夜の中に枯木となりしかば、常又觀音寺へ遷りかへし玉ふ

御製　誓ありていつも春の花なれば見る人さへも常盤なるべし

當寺は子安觀音とて、靈驗世に知る處なり、近卿の婦人は姙娠中五日帶を締めざること、昔より變せず、紺屋に用ゆる染形紙は、當町の名産にして、諸方に販賣す、町中旅舍多し、野島屋紺屋等は、尤

不斷櫻ノ由來



野島屋

も有名なるものなり

野嶋屋は街道の右側にある旅店にして尤も古くより營業し來れるものなり旅客を待遇すること親切叮嚀なれば旅人の宿泊するもの次第に增加し繁榮日に加をるといふ蓋し當町第一の旅舍なり

紺屋

旅店紺屋は當町の中央右側にあり三代前の開店なれども主人の用意周到なるより旅客の宿泊するもの多く近國近卿の人の定宿とする所にして座敷清潔調理美味なりといふ

刃物職菊一

當町の中程八留眞神社の傍に刃物を商ふ店あり是れぞなん其名も高き刀鍛治職菊一にぞある當店は古來刀鍛治職なりしが維新以來刃物類一切を製造販賣することゝなり其の造る所の品の精良無比なれば其の名世間にいや高く關東諸國は更なり北國四國より中國九洲等の旅人か皆求めて以て賞する所なり

磯山

白子の町を後に見て　急げばいつか磯山や　千里の村も早や過ぎて

千里

上野村

津へ二里十六丁

かじ屋

万屋

小川

中山

町屋

江戸橋

程なく着くは上野村　村とは云へど其の書　織田信包が城趾(じようし)とて長さ大凡二十丁　貨食(かしよく)の店や旅舎(りよしや)多く　軒を並ぶる商店は　日に繁榮をなすとかや　多き旅店の其のなかに　かじや萬屋二店こそ　土地に名高きものぞかし

旅店かじ屋は當驛の北入口にあり主人の法意宜しければ旅客に接する親切叮嚀にしてしかも宿泊料は極めて安價なりと云ふ他に多く比を見ざる所なり

萬屋は中央左側にある旅店にして古き開店なり座敷の數最(い)と多くして皆清潔に器具割烹等能く注意し且旅人の待遇(たいぐう)を親切になすと云ふ

上野を出でゝ小川村此の處より一身田への道あり　長き松原打ち過ぎて　中山越へて早や町屋　村のはづれの左側　緑色添(そ)ふ根上りの松を後に行く繩手(なわて)　道を横ぎる志登茂(しとも)川　川に架(か)けたる江戸橋を

渡りて歩む程もなく　伊勢街道の別れ路と　茲に始めて一條の　廣き通路の両側に　軒を並べし町つづき　是れなん縣下に名も高き都會の一と呼ばれたる　津市とこそは知られける

伊勢別街道　坂の下より津市迄

近江路の行旅の客よいざ來れ　雨が降るてふ土山を　後に見なして行く道は　行程三里其の間　足指漸く仰ぎつゝ　知らず識らずに名にし負ふ　鈴鹿峠の絶頂に　近江國甲賀郡東澤村に両國脚下に白雲蹈みしめて　憩ふ茶店は國の名と　同じ家号の伊勢屋なり

鈴嶺の絶頂に山陽の翁が筆にて伊勢驀てふ三字の看板を軒端に掲ぐるはこれなん旅人宿伊勢屋にぞある此の家は古るき旅店にして

伊勢別街道　坂之下ヨリ津市迄凡七里

鈴鹿峠

旅店伊勢屋

名物善哉餅

田村神社

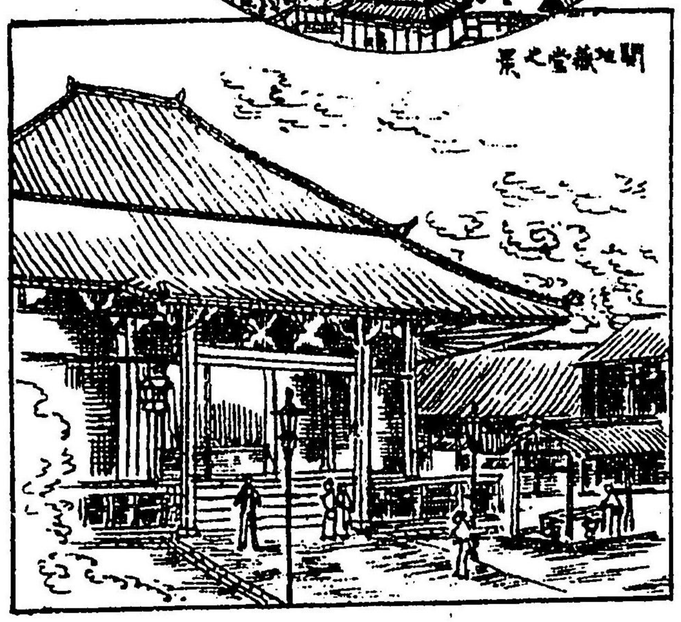
客待遇の叮嚀に殊に山水の美を前後左右に集むるのみならず田村神社鏡岩など云ふ古跡の近傍にあれば旅人の宿泊するものいと多し又當店の名物善哉餅は甘味賞すべし今の主人は俳名を雪山とて風流の道を好み名吟のいと多かる中に近日の作なりとて聞き得しまゝ左に記しぬ

廿三年元旦　春待ちし甲斐や御蔭の浮世節　雪山

田村神社　鬼は何時に今は蚊もなし社かな　雪山

多津加美坂は九折り　下り八丁の峻に　曲れる數が二十七、汗は流れて脚は痺へ　笑ふ者は膝ぞかし　坂の絶頂田村堂　いはい込めたる神は誰れに　音に聞えし田村麿

俚傳に昔し田村將軍此の山に棲む惡鬼を誅して行旅の患を除けりといへどそはとり留めもなき空言にて其の昔し田村麿嵯峨天皇の勅を奉じて藤原仲成を此の山に遮ぎりし事あれば其れ等に附會し



て此の處に神社を建立したりとこそは思はるゝなり本社は土山の東の入口にあり

山の麓の道傍に　鎮座ます權現社　天照神や荒魂　瀬織津姫に氣吹戸主　速佐須良姫は相殿ぞ　下を流る鈴鹿川　老杉茂りて晝暗く　社域は殊に幽靜なり　傍へに立てる標木は　其の名も高き孝子なる　万吉氏が紀念碑を　茲に建てんと計りてし　義士の心ぞ芳ばしき

鈴鹿權現社正面、鳥居石階の上に中門あり、又石階一級を上れば右に神馬屋直會殿あり、左に稲荷祠あり、更に石階一級を經れば南に面して本殿あり、本殿の右に並びて大山祇祠、巧靈祠あり、其の奥に愛宕の小祠あり、愛宕小祠の正面より、石階を下れば、直に前の稲荷祠の傍に達す

孝子万吉は坂下驛なる字古町の者、家固より貧なるに、万吉四才

孝子仁人ニ會ス

の春父市右衛門死し母くめ万吉と次男の吉次郎を懐さて人に雇はれなどして其の日を送りしが万吉六才になりける年吉次郎虫の氣にて死せしかば母之より積を病みて斷へず惱み勝ちなるを万吉かいくしく撫でさすりするのみか晝は往來の人に請ひて荷物又は鈴蘿刀など持ちてさしも峻しき鈴鹿峠を幾度となく上り下りして聊かの賃錢を得てかすかに其の日の料に充てけるに天明三年万吉八才の折大饑饉にて恒の産ある者さへ餓死する者多かりしに万吉は愈はげみて稼ぎつゝ半合一勺の米を得て母子相ゆづりて之を食し漸くに餓死をまぬかれける其の間の勞碌果して如何にぞや此の年幕府加下の士石川忠房大坂城番の在勤を了りし歸り途頃しも八月十五日給鹿山道の饗が坂に於て万吉が繩に貫らぬける錢四五文を手に持ちて通りかゝる狀の不便さに呼かけて身上の事一伍一十件を尋ねてそゝろに感涙を催し遂に万吉が家に立ち寄りて白銀な

冷泉爲泰卿ノ詠歌

坂之下

闕へ二里廿一丁

大竹屋

ど興へて慰めけり是よりして孝子の名遠く世に聞こゑ住來の貴人必ず立寄りて物など取らせける冷泉爲泰卿万吉の事を聞きて

撫子の是ぞ誠の花のつゆかゝるもありとあはれにぞ聞く

と讃まれしとなん万吉十二才の春江戸に召され白銀二十枚を賜はり母くめには終身一人扶持を給せられけり後文政四年万吉四十六才にして江洲信樂の代官多羅尾靱負に召され德本と云ふ苗字を給はり士分に取あつかわれけり至孝忠直の志一生かわらざりしといふ

今は坂路も早越へて　岩屋の觀音伏し拜み　名ばかり高き清瀧や

二十余町の山路をば　たどりて今は坂の下　旅店大竹名もたかし

大竹屋は昔より有名の旅宿にして舊時は本陣たりしと云ふ此の家の庭に不斷櫻あり元祿年間の植へ付けにして樹の經歷二百有余年幹の周圍凡そ八尺五寸なり天保二年三月御天奏日野大納言より依

不斷櫻天覽ニ入ル

詠歌

杏掛

四軒茶屋

托にて進上せしに世に稀なる珍樹なれば仙洞御所へ御廻しになりたる事あり四季共に花咲く世に珍らしき樹にしあれば諸名家の此に投宿して揮毫せられしものいと多じ去ぬる明治二十年皇太后宮御通幸の除當家に御休息あらせられし折かかる深山里に春にもあらで咲く花の端なく天覽に入しりこそ果報なれ諸氏の歌あり左に錄す

近江路の雪の寒さも忘れけり不斷櫻の花の坂下　杉孫七郎君

今日よりは不斷櫻も世にめでゝ雲の上にぞ香ひ初めける　石井邦猷君

長閑なる此大御代は庭櫻いつも春とて花の咲くらん　松波資之君

坂の下を立出でゝ　杏掛村や四軒茶屋　茶屋の女がかしましく　筆捨山ぞと呼ぶ聲に　煙草くゆらし眺むれば　下を流るる八十瀬川

筆捨山　大黒蛭子觀音岩　長持岩や女夫岩　狩野法眼元信は　妙景摸寫の難しとて　筆を捨てしといふなれど　記者俗眼の見る所　異なる景色もあらざれば　かくてとなきまま筆捨てて　爪先下りに行く道の　一の瀬村も早過ぎて　程なく着くは其の昔し鈴鹿の關の舊趾とて　其の名も今に關町ぞ

狩野法眼ノ談

一ノ瀬

關町

關町は坊間凡そ十八丁余戸數八百余人口三千五百余あり德川幕府の當時には東海道は五十三次、桑名に次げる名驛にて、上り下りの旅人は左ながら織るが如くなり（宮は創立ち四日市宿り關の地藏は直ぐ通り）是れぞなん驛の娼婦に思を寄せし戀歌なり閑話休題當町は三區に分れ西の入口に追分あり一は東海道にして一は大和街道なり道の北に觀音山あり山上に觀音大士の石像三十三体を安置す又登臨の勝に富めり道の南に城山あり關長門の守の故城趾なり驛中に地藏

� 楠原（井二丁

觀音山

寄岩古松多ク伊勢海衣ガ浦遠洲紀洲ノ諸洋ヲ見ルベシ

尊あり關の地藏とて其の名世に高し

地藏堂は新町にあり九關山寶藏寺と唱へ大同元年の開基なれど其の後兩度の火災にかかり今の堂は元祿九年の建立に係ると云ふ堂宇は修潔にして清麗殊に其後堂は關川の清流を直下に見下ろし青々たる數十頃の田畝を隔てて群峰に對し園中の泉水には鯉魚躍る雪晨日夕風景の清絶得も言はれず去れば皇太后宮御通輦の際にも一夜の行宮に充て玉ひけり

關地藏堂

九關山寶藏寺

關の地藏に振り袖きせて奈良の大佛婿に取るとは云へど此の尊像は去る大なるものにあらざればふさはしき緑にはあらず又紫野の一休和尚が開眼の導師となりて尿をしかけしといふは文明年中再建の折彫刻せしものにて今の像にはあらずかし因にいふ關扉御膳料とも各二錢づつなりと

旅店會津屋

一休和尚の故る事を以て世間に其の名も高き地藏堂そが前にあり

一等旅店

樓上ノ眺望

てこれと名を爭ふ旅店はこれなん會津屋なりとす當店は實に地藏尊の前にありて當驛中にていとも大なる旅店なり客室は廣くして何れも清潔に客人の待遇殊に親切なりさればにや一ヶ年の宿泊人は毎に一万餘人に上り現に一等旅店の地位を占めたり以て其の平日を知るべし當店の裏座敷は近年改築せしものにて其の樓上は眺望の佳絶なる得もいはれず北には遠く羽黒山の突如たるを望み近く關富士の峨々たるを見る左の方に奇岩の屹々として聳ゆるものは觀音山にして眼下に清流の淸々たるものは鈴鹿川なり又雀頭山加行山等は高く天を磨して南窓の前面にあたり風景の絶佳なる多く他に見さる所なり殊に當店主人が奇警の注意といふは表二階は博士足のまゝにて上り下りすべき樣にせし事にて旅人の便益甚だ多し嗚呼足を當驛に止めて地藏尊に參詣するもの此の家に一宿を投せば併せて亦天然の美景を探ぐる事を得ん

旅店玉屋利右衛門

十二代ノ主人ハ美術家ナリ

十六代ノ主人ハ學者ナリ

所藏ノ珍寶

驛中の旅人宿は會津屋玉屋鶴屋山石等を尤も大なるものとす又菓子に關の戸と云ふ名物あり舊幕の頃薩洲の殿さんは是非共一許への土產とせしよ〻云ひ傳ふ

玉屋利右衛門は當驛中の町にあり四百餘年の昔より今日迄十七代連綿たるいと古き旅店なり開業の當時より今に至る迄客人を接待するの叮嚀なること調理の美味なることなど少しも變ることなければ遠近の人々皆定宿として來り宿するものいと多し當家十二代の主人は有名の美術家にして裏座敷に自分が彫刻せし欄間あり又十六代目の主人は号を伯通といひ名を矩道といふ文學を好み猪飼敬所の門に入りて數多の勤苦を重ね當地有名の學士たりし其の著はす所の名義所見といふ書の如きは廣く世に行はる當家は古るき家なれば古寶珍器を藏する事多く中にも備前三郎國宗の名劍は先祖傳來の品にて嘗て藤堂候の覽に供せし事ありといふ當主に至り

名物菓子關ノ戸本舗深川屋

加茂季高ノ詠歌

益家業に注意し殊に勤勉を旨とす明治十年秋畏くも皇太皇后陛下御通輦の際其の休憩所となり後又明治十一年春両皇后陛下御通輦の際休憩所たるの榮を得たり四百年間同業を營み益盛大に趣くとはげに珍らしき事ならずや

名物とて其の名を世間に知られたる深川屋の關の戸は先祖傳來の銘菓にして其の製法秘法ありて數年を經るも腐敗變味せざるは一種特異の妙といふべし是れは古昔より伊勢參宮の旅人が國許への土産として購ふものにして既に今を去る六十一年前御蔭參りの節有名なる歌人加茂季高の翁此の菓子の名ある事を知り通行の際當店に立寄りて是れを求め其の風味の佳良なるに感じ筆を執りて

ふるき名をここにとゞめて鈴鹿山世に音高き關の戸の餅

と詠せし事ありし之れより此の吟歌と共に世に名高くなりて愈盛大を極めたり伊勢參宮の旅人は國許への土産には至極適當のもの

旅客ヘノ注意

旅店鶴屋

ならめ然るに世には奸商の徒ありて類似の品を製し當店の名稱を以て賣捌くものあり當店の体面を汚す事少なからずとて當深川屋主人は明治廿一年農商務大臣へ出願して商標を有權せりと云へば商標を目印に購ふて可也因に云ふ本年は賣捌高非常に增加し既に郵書を以て國許より注文するものも之れあり混雜一方ならずと云へば入用の旅人は參詣の節注文し置く方却りて都合よからめ

關町の中程左側に舞ひ鶴に吉の字の目標を高く軒頭に掲ぐるものは之れ名實驛著名の旅店鶴屋吉兵衛なり當店は實に有名なる旅舍にして遠近諸國の旅人が常に定宿となす處繁榮日にいや增すと云ふ殊に當主人は意を商業に注ぎ本年の如きは伊勢大廟御蔭の當年にして各國人の參拜いと夥しく隨いて各旅店何れも皆一大混雜を極め万事旅客の爲めに不自由なること多からん是に於て當店は一層勉勵を旨とし客室に改修を加はへ雇女の數を增し投宿旅人をし

旅客接待ノ有様

て洽ねく満足を得せしめ定宿の定宿たる義務を果さんとは是れ當主人が注意の至れるものにして記者現に之れを目擊したり故に此の家に宿を投ずるの旅人は其の便益蓋し少なからざるべし今當店が客を待遇する有様を記すれば

一當店の大なる事扶桑艦の如し　間口八間奥行六十間疊數四百余疊客室の數四拾余間あり

一當店の旅客を待遇するのよき事傾城の如し

一當店の調理の美味なる事甘露の如し

一當店の客室庭園等の美麗なる事日光の如し

一當店屋女の美なること小町揚巻姫の如し

此の他投宿の客人へは一室に一人づゝの屋人を付け置くと宿料は極めて安價を旨とすると又關地蠟算の開扉を望まるゝ客人へは當店より開扉料を支拂ふとなきは皆主人が注意の至れるものなり一

旅店山岩

大島居

觀進橋

楠原

樟本へ廿三丁

宿を投じて其の妄ならざるを知り玉へ

山石は當町の右側にあり十餘年前の開店にして日に月に繁榮を加へ現に一等旅店の地位を占め向ひ側に支店を設く（手前宿の儀は十余年前の開店にして日猶淺きが爲客室も狹く待遇向も不宜下女は皆三平二満の武骨者とても客人に満足を與ふるとは出來間敷も料理は美味に其の上安價に仕り道具は精々念を入れ舛御親切の客人は御立ち寄り下され）とはこれなん當店主人が飾りなき口上にぞある通行の旅人は投宿して主人の眞實なる親切を味ふべし

東口なる本崎村・長直に進めば東海道　右に折るれば參宮道　折るゝ所に大島居　鉄道線を横ぎりて　進む程なく關川の　川に架けたる觀進橋橋に　佇み見渡せば　三子經足錫杖の　諸山は遥かに依々たり　橋を渡りて程もなく　古厩楠原林村　中縄諸村過ぎ行けば

樟本驛は町づくり　角屋旅屋二店こそ　土地に名高き旅店なり

椋本

羅田へ二里六丁

旅店角屋

旅店蛭子屋

妓院客舎も數多く　多き旅人が此の驛に　足を止むるも澤ならん

角屋は椋本驛往來の右に折るゝ角にあり十六代の昔より連綿相續きて今日に至れる古き旅舍にして中國九洲邊よりの顧客尤も夥しく客接待親切にして調理美味なれば客人年々にいや增すといふ座敷の數いと多き中にも裏座敷の樓上は北の窓より田島松林を隔てゝ遠近の諸山を見るべく南は近く經が峰に對して絶景いはん方なし當し他に多く見さる所なり特に本年は御陰年にて來客も夥しければ主人は注意を加へて客人を遇する心組なりと云へは通行の旅人は一宿を此の家に投じて可なり

椋本驛の中央左側に營を繞ゆる層樓はえれぞえれ旅人宿蛭屋にぞある此の店は今より凡そ百余年前の問店にして最初の程は重もに商人の客人のみにて通常の旅店なりしが當主の代に至り益々繁榮を來し恐れ多くも二品親王又は九條殿等を始めとして其の他諸官吏の宿泊或は休憩に充てられ從ひて其蛭子屋てふ名は廣く世間に稱せられ遠近の來客日を追ふて增加せりと聞く之れ全く當主が商業に勉強すると客接待の懇切なるとの致す所ならんげに目出度事にこそ夫屋は総二階にして凡て二十余室百五十餘疊あり室皆奇麗なるが中にも十六疊の廣間は尤も美觀なり

高野尾

しばゝが間息をつぎ　出づれば松柏蓁々と　茂れる松原踏み分けて高野尾村も早過ぎて　伊勢に名だゝる鬼八野や　錢懸松は名高きも　何時の頃にや枯れにけん　五尺許の舊幹を　小祠の中に殘すのみ

錢懸松

錢懸松は大神宮行宮の跡を失なはざる爲とてうへしものにて小祠もありけるに小祠は失せて松のみ殘りたれば人々こゝにて大神宮を遥拜し松の枝に錢を懸けし故この名あり今は枯れてなし

錢懸松ノ故事

錢懸松を後に見て　行けば程なく羅田村　旅店花屋は名も高し

窪田

津へ一里廿四丁

旅店花屋

一身田

津へ一里十九丁

高田山專修寺

花屋は當村西入口の右側にあり昔しよりの旅店にして御陰に出會ふ事前後三回客待遇の叮嚀なれば其名遠く西九州へ迄も轟ろき遠近よりの來客多く開店の始めより今に至る迄凡そ二百有余年の間始終一日の如く顧客年々に增加し當驛中繁榮他に比類なしとかや

窪田村より一身田　一身田より津市までは　僅か一里の道そかし

一身田はよき町ぞ　高田本山專修寺　をひちや參りの其の折は　信者の群集夥し　旅店に辰己屋名物には　櫻をこしぞ名も高し

高田山專修寺は眞宗專修寺派の本山にして祖師の像を安置す寺域一万八千餘坪本堂は二十四間四面傍らに阿彌陀堂十八間四面本尊は一寸八分閻浮檀金阿彌陀如來善光寺と同体なり本堂の右に對面所講堂食堂鐘樓白鷺池あり阿彌陀堂の左に廚堂あり歷代門跡の遺骨を収む境内には櫻樹と垂柳とを交へ植ゆ

太祖親鸞上人元仁中にありて伽藍を下野に起し高田山と稱号す弟

專修寺ノ由來

子眞佛上人（下野國司大内良信ノ子）一向專修の旨を弘め住持職を傳わる之れより八世を經て大僧都法印眞惠加賀越前近江を弘教して伊勢に入り寛正五年一身田村に伽藍を建築し翌年下野より本尊を移し來る卽今の專修寺なり蓋し此の地は昔かし開祖化導の勝地なりと云ふ明治十二年今上皇帝陛下御震筆見眞の二字の扁額を賜へり

旅店辰己屋

旅店辰己屋は中之町にあり遠さは東京越前加賀近江等より近さは近郷近村より本山へ參詣する人々の定宿とする所にして常に來客の跡を絶たずと云ふ且つ此の店は廣く同業に交際せず又何れの講社へも加入せずされど主人が性來の眞實より客待遇の親切なると調理美味宿料安價なれば繁榮日にいや增し現に本年新築せし大廣間（五十疊は美麗なる高樓にして春輝樓と名づく遙かに青松枝を交ゆるの間に勢海の白波を眺め近く田畝廣漠の間に民家の斷續す

名物櫻をこしノ
本舗下井嘉右衛
門

るを見る景色實に佳絶なり此頃亦隣家に支店を設け盛に味淋燒酎の製造をなすといふ

菓子商下井嘉右衛門は東町にあり今を距つる凡そ二百年前の開店にして實に當地の名物櫻をこしの元祖本舗たり抑も此の櫻をこしといふは當家の祖先が發明せし者にして初めの程は別に名とてはなかりしが凡そ百六七十年前千種正三位有功卿專修寺へ御立寄ありし節命を受けて此の菓子を出せしによりてこに始めて櫻をこしでふ名は廣く世間に稱せらるるに至りしなり有功卿の詠歌あり

しら雲をれこすばかりに咲みちてやまのかいある櫻なりけり

今の主人は非常の奮發家にして進みては同業者の爲めに利便を計り退きては自家の商業に勵精す故に內は顧客日に增加して店前常に市をなし外は仝業者の爲めに推撰せられて今現に菓子正業組合の會長たり因に云ふ此の店の傍より上野へ達する道あり標石を建

つ

一身田を後に見て　繩手つゞきが半里の餘　行けば程なく津市なる
北の入口此に亦　伊勢街道と會ふになん

鐵道線路

豐原の秋津洲の　西の半は中國や　四國九州の諸人が　群り集ふ
浪速津や　梅田といへば停車場　我れ後れじと爭ひつ　逸足早く乘
る滊車の　滊笛の聲と諸共に　轢り始むと思ふ間に　早や吹田驛茨
木は　往ぬる昔は片桐が　領地とこそは知られける　高槻すぎて山
崎の　渡りを越して與一兵衛と　尋ねも敢へず向日町　京の都の繁
榮や　名所舊跡澤なれど　玻窓瞬時に瞥過して　伏見の稻荷遙拜
し赤穗の忠臣大石が　隱れ住みにし山科や　大谷馬場も早過ぎて
宇治の川瀨を打渡り　左に見なす琵琶の湖や　やがて草津の走り餅

北陸東山両道の　旅客と共に此の地より　關西鐵道に乘り易へて
南に向ふ石部驛　三雲の驛に着ぬれは　之れより先きは本年の
二月中旬に開通せし　いと新たなる鐵道の　線路は栢植にゞ達すな
り

芭蕉翁ノ略傳

俳歌を以て世に名高き芭蕉翁は伊賀栢植村の人平宗清の苗裔なり
宗清の子孫派れて栢植松尾福地二氏となる翁の父を儀左衛門といふ松尾氏なり翁名は宗房忠左衛門と稱す國主藤堂氏に仕へ藤堂良精の世臣たり良精の子良忠蟬吟子と号す和歌を北村季吟に受く翁亦隨て學ぶ後良忠病沒す宗房悲痛屢致仕を乞ふ聽かれず宗房乃ち俳歌一首を門に書して去り、諸州を歴遊し、髮を剪り道服を着け、自から桃青と号し、妻孥を蓄へず、其國を去る一百錢を有するのみ、沿道俳歌を好む者、爭ふて之を迎へて、金を贈る、翁乃ち貧民に施し、一錢を留めず、東遊して深川の里に居る、庭に芭蕉數株を植ゑ、因て芭蕉庵と名づく、又池あり吟眺自から樂む、古池や蛙飛びこむ水の音の名句は、此に作りし者なり、去りて奥羽に遊ぶ、門人益進み、翁の名天下に偏ねし、翁獨り居る出づるに僕從なく、入るに侍者なし、其の深川に居るや、柱に一瓢を掛け、米數斛を容る、米盡くれば門人之を納る、其有無を問はず、元祿七年十月浪華にあり、將に九州に遊ばんとす、偶々病を病む、門人其角等病を看る、數日病益劇しきも、精神少しも衰へず、死に臨として、門人と刻苦すること十三日、沒する時年五十三

栢植よりは三里の余　山路つづく加太越當時鐵道開通の最中也越え行く先は
關驛や　龜山驛に達すなり茲に鐵道二つとなり　右なる方は津に達
し左の方は米遂に　四日市へこそ達すなり

龜山町

龜山町は關より一里半の所にあり、戸數八百餘、人口三千六百余あ

鐵路左右ニ分カル

り、石川日向の守の故城趾なり、此の處に鈴鹿郡役所あり、郡の中央なるが故に、自然人足繁く、繁榮なる都邑なり

庄野

石藥師

黒田孝富ノ傳

龜山より東二里にして庄野驛あり戸數五百に充たず

庄野より東一里余にして石藥師あり、驛の人口に坂路あり、坂の中央に石藥師堂あり、之有名なり、此堂は左甚五郎の作なりと云ふ

黒田孝富頑一郎と稱す龜山の藩士なり家固と微賤なりしが資性卓見不羈にして幕府の末藩主の命により小崎利準(岐阜縣知事)近藤幸止(和歌山縣書記官)等と京師に留學し尊王の說を唱へ浪士の間に周旋し三條岩倉諸卿の知遇を受く藩に歸り大に藩論を定め累進して大夫となり門閥の弊を一洗す遂に佐幕黨の嫉む所となり藩士の爲めに惜き哉暗殺せらる後明治十六年碑を眞澄神社の境内に建つ三條公爵の篆額川田甕江の撰文なり遺孤甲子郎予と相知る亦豪邁の士なり現に陸軍に從事せり

上野町

本津川

鳥ヶ原

上野ヨリ二里三丁

津市に達せ丁鐵道は　參宮鐵道と接續し　南に馳せて末遂に　山田へこそは着きぬべし　參宮鐵道は當時測量最中なり

伊賀街道長野越

後醍帝の舊趾なる　笠置の山を後に見て　船を雇ひて本津川の早き流れを逆のぼり　峠だつ岩や水の瀨を　彼方此方と綾どりつ大川原に沓着にける　歩ゆみ運べば鳥が原　自然に出る炭酸の泉の水にかつを醫し　長き山みち又野みち　越へ行先きは長田村長田の川を打ち渡り　小田村過ぎて上野町　其の入口の古跡こそ

【鍵屋の辻に臨軒茶屋　てれ沓荒木が其昔し　鍵だを報せし所とて

其名も高く聞へける

上野町

上野は伊賀國第一の都邑にして藤堂氏の舊本府なり人口二千二百餘

平田へ一里六丁

縣社菅原神社

名物 崎菓子

佐那具

一里十九丁 野ヨリ

栢植

佐那具ヨリ二里十二丁

旅店友忠

郡役所、郵便電信局、警察署、裁判所等あり、商賣繁昌市街四賑なり、城山は筒井順慶の築きしものにして、今尚其の趾を存し、公園に供して、四民來遊の所とす、市中に縣社菅原神社あり、道真公を祭る、毎年十月廿五日を祭日とす、近邇近村の老若男女皆群集し、各町より樓車を出す、其の賑やかなること、近國に比類なし、此の地は風俗言語共に、上方に似てみやびたる所あり、土地の名物は長崎菓子なり、亦多く松露を出す、此地より佐那具を經て栢植に達し、それより加太越を過ぎて、伊勢の關へ出づるなり、之れを加太越と云ふ、當町中にて尤も盛大なる旅舍は、中町友忠にして名菓を賣るは中町木具屋なり

旅店友忠（曾我忠兵衛）は中町にあり當節第一の旅宿にして待遇親切割烹甘美なり客室もいと多く皆清潔なるか中にも堀を隔てし別莊とを最も清麗なるものにして眺望も亦佳なりされば貴顯紳士の人々は皆此の家に宿を投ずると云ふ

菓子商 木具屋

名産様々

修竹堂木具屋は中町にありいと盛大なる菓子店にして種々の銘菓ある中にも殊に有名なるは様々てふ菓子にぞある抑も此の菓子の來歴を尋ぬるに俳歌を以て有名なる已屋翁は嘗て此の家の眞向に居して俳歌を教授す當家の祖先某も亦翁の門に入る一日其求めにより櫻花形の菓子を製し之れを贈る翁大に喜び賞味一方ならず即ち其の銘を翁に乞ひしに翁は故主採丸子君の別館の庭園にある櫻花を賞愛すること一方ならず其の詠歌より稱して様々櫻と云ひ錦を様々園と云ひし事あり此菓子も櫻花形にして余が賞愛も様々櫻に異ならざれば銘を様々と云ふべしとそれより様々と名づけしと云ふ有名なる已屋翁已に沒して茲に二百餘年翁の名聲海内に高く而して賞愛せし銘菓様々も亦當地の一名産として今に存し翁の名と共に聲價を落さざるは目出度き事ならずや

平田驛
平松へ二里十六丁

平松驛
長野へ二里廿五丁

旅店伊勢屋

長野峠

幸坂を登ぼりつゝ　本町通り菅原の社の前に額つきて　農人町や車坂下る彼方は西明寺　村につづける荒木村（荒木又右衛門が生れし地なり）寺田の橋を打ち渡り　寺田村や千戸村　畑村越へて平田驛こゝは名にをふ驛路とて　商店旅舎もいと多く　車屋綿屋なんど云ふ　茶店に休むも多からん　平田を出でゝ川北や　廣瀬の村を行き過ぎて　阿波の神社を伏し拜み　富永越して上阿波や　平松驛の伊勢屋にて　足の疲れを休めつゝ　長野峠にかゝりけり

伊勢屋は平松驛の中程右側の旅店にしていと宏大なるものなり近年廣濶なる客室を新築し其の結構尤も美麗修潔なり待遇親切なれば旅客の足を止むる徒ひて多しといふ

往にし昔しは最高き　つづらをりなる坂道も　今は山腹つらぬきて人力馬車も通ふなる　百間餘りの隧道や　登り下りの道筋も　以前に變る平坦は　御代の惠を諸人が　足の疲れを免ずに　歩み行

長野峠隧道
山中ノ古跡及奇巖

長野
片田へ二里十三丁

五百野村に皇女塚の古跡アリ

片田村
津へ二里十二丁

風早池

くなる百余町　長き山路も今ははや　越へて下れば長野驛

長野峠の隧道は明治十七年に土工を起し全十八年に開通せり山中に大塚の古跡及蛙岩獅子岩等の奇巖あり路傍に茶店の憩ふべきものなし

旅店米屋は驛中にて　客足しげき店ぞかし　長野を出て來る程に次第々々に下りみち　三卿村や足洗ば　驛時に通り過ぎ早や　五百野へとつきにける　こゝに街道二となり　長直に進めば片田村　村の彼方は殿村や　南河路の村々を　越へ行く先は津市なり　後へもどりて五百野村　かたへに立てる標石を　右の方へと折れ行きつ

庄田の村もいつしかに　越へて進めば戸木村や　風早池を横に見て

久居の町へ入りにける　こゝは名にをふ其の昔し　藤堂氏の支府とて　軒を並ぶる商店　いとゞ盛りの町ぞかし

久居町

久居町

旅店　八町屋
桃林
月本村

久居町は一志郡の北端にあり、戸數八百余人口凡三千余、藤堂氏の舊支府にして當時一志郡役所あり、商店いと多く皆繁榮し、殷賑なる一小市街なり旅店に八丁屋割烹店に周成櫻澤清等尤も有名なり久居神社は鷹跡町にあり藩主の祖先を祭るといふ此の町の近傍雲出川の清流に沿ひて桃林あり花時遊觀の人多し

久居を出でて本村や　雲出の川の長づつみ　枝を交ゆる桃林の二花を愛でつつ行道の　川を渡りて新屋庄や　小村を越へて行程に　早や街道へ月本と　こゝに始て本路なる　伊勢街道と會ふになん

初瀬街道阿保越

倭路や奈良の都に足を止め　早や春風の長閑なる　二月三月四月堂

奈良ノ名所古跡

三輪

初瀬へ一里廿三丁

初瀬

萩原へ一里十一丁

豐山長谷寺

萩原

三本松へ二里十八丁

三本松

名張へ二里十二丁

咲き香ふなる八重櫻　さる澤池の水の面に　うつる柳は絹かけやかすがに見ゆる三かさ山　若草山や若さ井の　七堂伽藍いかめしく山　奈良の旅館や三輪の茶屋　彼の梅川が舊跡も　尋ねて今は初瀬の驛

豊山長谷寺は初瀬村にあり、有名大寺にして、本尊十一面觀世音、風景極めて佳絶にして、境内に壯丹及び櫻樹多く花時尤も美觀なり詩人常に群をなす

こゝに名高き長谷寺もゆ詩で、進むは原の　驛を立ち出で行く道は三本松も早過ぎて

鎌倉最明寺時賴公手植の松あり故に三本松といふ

歩む彼方は伊賀の國　右手は清き川流れ　左手は小さき丘つづき山と川との間だをば　通ずる路を是ぞなん　大和と伊賀の通路成

大和伊賀両國ノ國界

二大橋
黒田橋
新町橋

月瀬ノ梅林

赤目四十八瀧

初瀬街道と知れける　名にし要の道なれば　旅人常に絶ゑ間なく
殊に賑あふ春さきや　中國四國や攝河泉　諸處より伊勢の両宮へ
詣づる人の街路とて　引きも切ざる旅人が　歩み運びて今ははや
伊和両國の國さかい　里程記せる標木を　後に見なして歩を移し
黒田の川の岸に沿ひ　錦生村も行きすぎて　道路愈々たいらかに
左右は一面皆田はた　遠方近ゲ見ゆる山林　参々伍々の村々は　木
々の梢や山のはら　方此方に見へ隠れ　歩行間もなく二大橋　黒
田比奈知の二大川　是にはじめて合流し　黒田峡のさんろくに　沿
ふて大和に流れ入　名張川とは是ぞかし
此の川の下流大和路に月瀬虎山長引桃ゲ野などいふ梅林の名所あ
り花時には遊客常に群をなす此の處にては早着川といふ
阿部田より南一里餘にして長坂村といふ地に赤目の瀑布あり絶景
にして四十八瀧の稱あり大なるもの高十八丈あり水勢危厳に飛瀉

名張町

阿保ノ三里十一丁

旅店小田屋

新田村ニハ旅店アリ

阿保村

伊勢地ヘ二里九丁

旅店俵屋

し激湍雪を飛ばす實に壯觀なり
橋を過ぐれば名張町

名張町

名張は舊名を梁瀬といふ藤堂氏の舊支府なり此の地は大和より上野
伊勢の通路に當り旅客常に群をなし商店旅舍軒を並ぶ當時郡役所警
察署等あり旅店の尤も盛なるものを小田屋といふ
小田屋は下横町警察署の傍らにあり近年盛大を極め來客最と多く
待遇の叮嚀なると宿料の安價なるとは皆人の稱する處なり
土地より出づる名産は　梁瀬の葛や鮎と鰐　紙茶松煙著るし
名張を出でて藏持や　田原新田諸村を經て　阿保の村へと着にける
村とはいへど此土地は　人家左右に立並び　商店旅舍もいと多く
村の中央の旅人宿　音に聞こへし俵屋とて　其の名世間に最高し
俵屋は昔より有名なる旅店にして近國に比類なき大なるものな

阿保ノ二乗仁帝ノ皇子塚アリ

伊勢地村

垣内ヘ三里

阿保峠ニ大峠ト云フ

旅店大和屋

り客室いと清潔にして接遇殊に丁重なり庭園に大なる泉池あり大小の鯉魚潑溂として躍ぢる捕へて以ちて客に供す精鮮賞するに堪へたり出入の客常に絶へず

夕張より小波田村を經て阿保に通ずる道あり中程に小波田越とて小さき坂路わりされど近きが故に旅人多く此の道を通るといふ

阿保村越えて下田原　村の彼方は伊勢地村　是より先は阿保越とて三里餘りの山つゞき　足の疲のいやませば　此所に息ふと最も多し多き旅宿の其の中に　大和屋社は是ぞなん　最も名高きものぞかし

此地を出て行く程に　山又山のとをげみち　足指次第に仰むきつ岩にせかれて潺々と　流るるきよき谷川の　音ぞかすかに聞ゆめり紆餘曲折の路なれば　林を出でて山に入り　或は高くまたひきく登り下りが三里の餘　長き山路の事なれば　伊勢地に多き馬　輿乘れ〳〵と進められ　其の馬方や輿かきに

峠ノ中央ニ石地藏尊アリ弘法大師一夜ノ作ナリト云フ

垣内村

二本木ヘ一里十一丁

旅店伊賀屋　大和屋

坐して峠を越もあり　互に手に手引をふて　詩歌ひつつ行もあり杖をたよりに歩む客　景色愛でつつ通る人　己が心の思ふまに　山路のうさを慰めつ　行きかふ人ぞ最多し　馬子が歌へる馬子歌の淘める聲は彼こちの　山にひびきて賑はす　草刈る童が呼ぶ聲や木伐る樵夫が斧の音　彼方此方に聞ゆめり　伊賀茶店越て伊勢茶屋や　三つの峠も早や越て　今は次第に下り坂　下ればこゝぞ内驛

阿保越の山道中凡　里を隔てて伊賀茶屋伊勢茶屋の二旅店あり山中の事なれば旅人休むもの多し此の近傍櫻樹多く景色宜し此の店に名物の餅あり

峠の絶頂より伊勢の海を一望すべし雄望甚佳なり此の邊茶店あり此處は峠の驛とて　旅店の數も最多く　足の疲れし人々は　伊賀屋大和屋なんど云　宿に息ふも多からん　垣内を出でて行く程に　早や中村も打ち過て、程なく着くは二本木や　村は名にをふ驛路とて

二本木 八太へ二里十八丁 旅店桝屋 角屋

八太村 小川へ一里

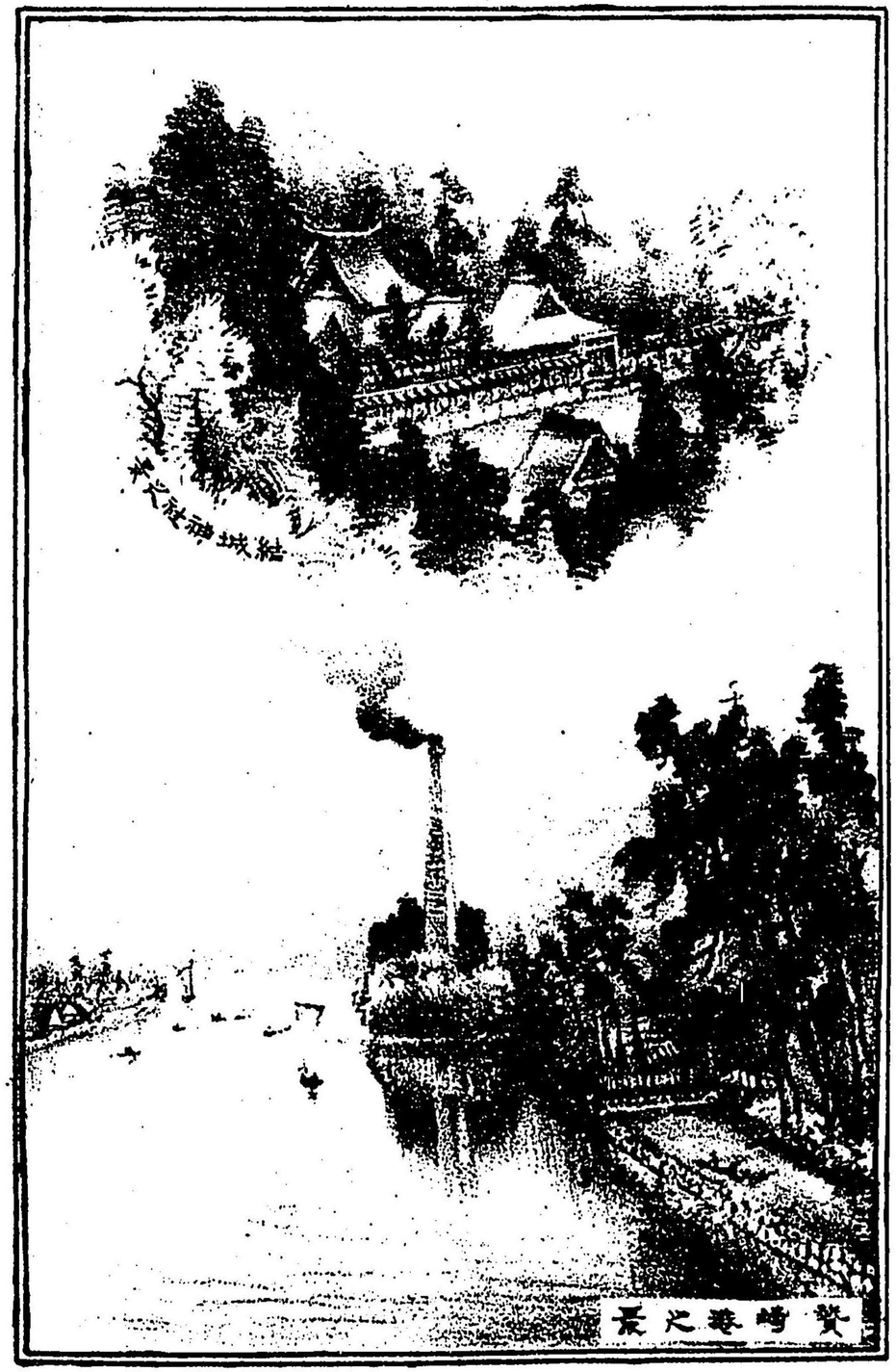
小川村 三渡へ一里八丁

津市 雲出へ二里五丁

商舎旅籠屋いと多し　二本木出でて大仰や　越え行く先は田尻村
こゝも商店旅舎多く　多き村々打ち過ぎて　八太村越して小川村
つづく村々打ち越て　嬉野過ぎて行く程に　道の左の一森は　津屋
城とこそ知られける　歩めば程なく三渡の　川の流に沿行けば伊勢
街道の本道と　出會ところはこゝぞなん　三渡驛と知られける
以上伊勢別街道及伊賀初瀬二街道を記し終りこれより更に北の方
津市より説き始め徐々に南して神都に達せとんす

津市

遠きものは音にも聞かん、近きものは目にも見ん、此は是れ當國第一の都邑、縣内四通八達の要衝に當り、座して四州二十二郡を控制すべ



き、形勝の地、人煙稠密にして衢路清麗、文物最も開けて商業殊に盛なり、其昔一畿域に其の名を轟かせし、櫟堂高虎が、賀勢二州に三十五万石を采領せし、根本居城となりしより、誰か歌ひ始けん、伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ、さりながら文學上、政治上、及び商業上の中心として、津市が未來に繁盛いや増すべき者とせば、豈に又津は伊勢で持つと謂はんや、彼の參宮鐵道が曲日蔭く、大廟賽客を……

……唯大廟賽客をのみ……濕雨一般黑烟濛靄の裡に、乘せ將ち去るとするも、津市が文學政治及商業上の中心点たるを失はざる以上は、濕里遂に何の影響する所ぞ、然れども若し果して此の鐵道が、帝國人民を促して、參宮を思ひ立たしむるの功ありとせば、旅客往日に十倍して、其の中必ず一宿を此に求めて國府の阿彌陀に詣する人、結城神君に謁する人あらん、則ち參宮鐵道が利福を、津市に與ふと謂ふも夫れ可ならんのみ、之れを要するに縣下に於ける鐵道が、近國に

參宮鐵道ト津市ノ關係

津市ノ位置及人口

於ける富を驅りて、一都邑に吸收せしむるの奇觀あらば、其の之れを吸收するものは、四日市にあらざれば則ち津市、若し夫れ宇治山田町のみといふは、則ち吾れ信せず

却説、津市は內海岸の中央部にあり塔世岩田二川に跨がり津崎港に臨む人口二万五千余市街殷賑にして豪商多く縣廳裁判所郵便電信局病院師範學校中學校等あり其の昔し藤堂氏の初世には塔世岩田二川の內のみ市街の觀をなし其以外は寥々たる一村落の有樣なりしが漸くに人家建て連なりて遂に嚴然たる街衢をなせりされど市制施行の以前は塔世橋以北を部田村とし岩田橋南を岩田村と稱へて橋內に別ちしも去年合一して津市と稱せりされば當市の坊數は凡べて八十一の多きに及び北の入口より南の出口まで長さ二里に及べり當市の名產は神綠子茄子團扇及び阿濃燒の陶器等とす

津市ノ區域

部田餘慶町

吾曹が部田の長談議、餘慶な事と耳傳ひ、過ぎ行く道の左側茫然ゆる

旅店松坂屋ト其兵備

遠帆樓ノ風景

旅店こそ、松坂屋とぞ知られける、

旅店松坂屋は津市の北入口東京道と西京道との遲分にあり著名なる旅宿にして屋舍尤も壯美麗に旅客の接遇尤も懇重調理の風味尤も甘味なれば旅人の宿を投ずるもの日に夥しく非常の繁榮を極むといふ客室いと多く何れも皆淸潔なる內に殊に近年新築せし遠帆樓は尤も美麗にして頗ぶる風景に富めり蓋し此の樓に登りて東を臨めば渺々たる勢海の白波を眼下に眺め遙かに參尾諸州の靑山を見るべく朝熊の高嶽は峨々として呼べば答へんとし左は鼓が浦より右は幸洲浦に至る迄一望の中に集り意發茂川の淸流は淸々樓下を流れ田園廣漠靑松其の間に點綴し漁船の黑烟を吐きて走るは龍の天に登るが如く白帆の波間に浮ぶは白鷺の空を飛ぶに似たり遠帆の樓名眞に空しからずといふべし若し夫れ曉鐘夢を破れば座して以て紅輪の天に昇るを拜すべく宏壯奇絕の風景を有すといふ

當店ノ便利

べし且當店は公園及縣廳の傍にあれば便利云はん方なし旅客若し勢海の美觀公園の佳景を賞せんとせば足を此の樓に止めて可なり行けば程なく右傍に、田徑一條開く所、市街を距ること二丁余に、本縣無二の公園に、鎮座し玉ふ高山社・藤堂公の祖靈なり

公園

公園は舊津藩侯の別邸なり丘陵に據り百花雜植す而して好期尤も櫻花〻紫躑躅の時にあり園門階を登れば高山神祠巍然として其の前にあたる祠の左傍若宮八幡宮あり祠前二株の牡丹櫻皆連抱の大にして花異類なり高山祠の左より登れば上に石樓あり座して勢海を挹すべし進むこと數十歩左顧すれば一丘の突如たるものあり傘蓋と号す上に招魂碑を建つ一省し顧てみれば蒼海綠渺淡雲際なし白凱皚々として空に懸り遠山模糊として煙雲の如く浩乎として內海の勝悉く目睫に會す園の廣さ數町周高く中凹み凹極まりて池となる形瓢に似たり鯉魚潑溂として躍る曲橋あり池に架す池傍

高山神社
若宮八幡

公園ノ風景

三重縣物産陳列場

亭あり小と雖ども結搆を極む階樂園は清麗閑雅にして今倶樂部を設く園後に三重縣物産陳列場ありて縣內の產品一として場に上らざるはなし凡そ此の園舊太守聽政の暇風流の遊を試みし所有名なる某園丁が慘憺の意匠によりて成りしものなりと云ふ風景の妙近國に比なきも亦固より其の處なり

中茶屋町
三重縣廳
榮町

中茶屋町に縣廳あり、去る明治十二年の建築にして、嚴然壯麗を極む、過ぎ行く先きは榮町、音に聞ゑし四天王寺、藥師堂は右側にあり

塔世山四天王寺

塔世山四天王寺は又護國殿といふ榮町にあり曹洞禪宗にして本尊大日如來天平九年聖武天皇諸國に四天王寺建立の勅を下し玉ふ此の地帝都に近きを以て諸國に先だちて建てしむ此の事早く停止となりて他に類少なし久安三年加藤景道之れを中興す後文祿三年信長公の母公此の寺にて逝去す塚位牌等あり慶長五年石田三成叛亂の時兵火にかかる元和五年太守高虎朝臣堂舍を再脩す境內に藥師

堂秋葉神社豐川稲荷芭蕉の文塚等あり此の寺には珍器奇什多く空山筆達磨像王羲之大文字東坡筆墨竹雪舟筆觀世音等あり

藥師堂

藥師堂又醫王殿といふ四天王寺の境内右傍にあり本尊藥師如來靈驗無双創立の始めより此の一宇のみ兵火天災等に罹かりしことなしといふ聖德太子の建立平景清の再興なりと種の不思議あり眼病治療の靈驗いやちこなれば詣人常に絶へず

旅店鍋屋

此處に名高き旅店は、井筒屋鍋屋河内屋等なり

藥師前に其の名も高き旅店鍋屋は今を去ること二百五十余年前德川二代將軍治世の頃より藩廳の特許維新以前までは塔世橋より北を受けて開業せし老舗にして今の主人久左衛門氏は正しく九代の後裔に當るとかや當家は昔しより講社に加入せず局外中立を守りて黨派の爭に與せず宿引を出して旅客を誘ふ等の事先代より一切之れを爲したる例なしされど江州攝州城州若州丹州諸國の中八百余村の行客が昔しよりの定宿とする所にて久しき年月を經たる今日に至る迄互に信義を守りて易ることなきぞ世に目出度き事にあらずや

旅店井筒屋

井筒屋は今より凡そ三百年前寛文年中開業せし最も舊き旅店にして祖先より講社に加入せず宿引等を出す事今に至る迄更に之れなき家風なるも近江丹波河内攝津山城諸國の貴客が旅宿と定むる所なり當家の後堂は數項の田畝を隔てゝ伊勢海に臨み窓上より見渡せば海雲茫漠たる際に尾參の岬角を望み繰渺の間に白帆の浮べる風景實に千里の内海眼下にあれば雲なき晴に紅輪の波間に輝るを拜する風流の客も多しとかや

旅店河内屋

豐世橋の北詰南西二方に出入口を設け軒頭高く一新講社の標旗を翻へすは之れなん旅店河内屋にぞある旅人の接遇いと丁寧二十の客室みな清麗殊に其の紅鶴樓の如き遠く勢海の白波を窓櫺の間に

土井翁揮毫ノ張天井

榮町
塔世橋
縣會議事堂
病院

万町
北町

望むべく近く塔世川の清流を眼下に見べし加之ならず東天紅を帶び旭日天に輝るや旭光燦として樓窓を射る宜べなり其の紅鶴と名づくる事且又此の樓の帳り天井は津藩有名なる碩儒土井有恪翁が畢生の力もて此樓の風景を叙せし詩を大書せしものにて筆力遒勁他に其の類あることなし又一奇觀と云ふべし因に云ふ此の屋舍は昔し有名なる割烹店なりしも其後病院となりて永く縣廳の有となり居りしを今の河内屋の主人が明治二十二年三月官に願ひて拂ひ下げを乞ひ爾來旅店を開業せしものなり

榮町過ぎて、塔世橋右に聳ゆる大厦は縣會議事堂にして、丘上白壁の煌々たるは市立病院なり、橋の清流數町にして、海に入る所を松尾崎と稱す、此の以南海岸の松原は、昔より安濃の松原と稱せし所なり、橋を渡り萬町過ぎて道岐かる、此の處標石を建つ、左に折れ北町を經て、右に折るれば東町とて昔しより旅店多し是れを本道とす

東町
岐路
塔世町
西町
京口町
丸之内
師範學校
伊勢新聞社
舊城

内喜亭

眞直に進めば塔世町西町京口町を經て丸の内に出で夏ならんには蓮花紅白研を競ふ城湟の彼方に師範學校の煌々たるを見伊勢新聞社の前を通りて進む程もなく新橋てふ小橋を渡りて分部町の往還に出づる捷路なり扨て此の城こそは藤堂氏累代の居城なりしなれど昔し富田知信が六萬石の城として繩張りしけるものなれば規模小にて觀るに足らずそは伊賀上野に要害無二の名城ありて藤堂氏が根據とたのみしなれば此には築城の必要を見ざりしが故なり

當地に於て燒鰻の美味を以て有名なるものを内喜亭とす亭は西町にありて盛大なる一大層樓を新築して嬉春樓と号し和風料理の外更に西洋料理の開業をなせり爾來一層の繁榮を增したり燒鰻を賞せんとするもの及洋食の風味を嘗めんとするものは皆此の樓に來れ

京口町の北角に菓子商甘甲堂あり堂の主人性淡善雅事を好み常に

菓子商
廿甲堂

新工風をなして雅致甘味の銘菓を製す就中越雪は本舗を以て元祖となす他店にて製するものは越路の雪と云ふ意味なるも當店は之れと異なり其の潔白なること雪に越へたりとの意味なりといふ

此宿は白禰ならねどいつとても消ゆる時なき越の雪哉　弘綱

又近頃一つの名産として製造せし銘菓月瀬は和州月が瀬の梅肉を以て製せしものにして甘中酸味を帶ひ風味尤も佳なり且つ當店の煉羊羹は其の精製當地に比なきのみならず遠く名を諸方に馳するといふ

旅店若六

東町にて旅人宿の有名なるものを若狹屋村田屋とす

旅店若狹屋六右衛門は通稱を若六と稱す東町にあり古るき昔しよりいと有名なる一大旅店にして遠近の來客常に跡を絶たず繁榮日に月にいや增し當市旅店の第一位を占む割烹の甘美待遇の懇切客室の清潔は云ふも更なり其の他万事凡べて不都合なる事なし殊に

主人ノ注意

當主人が繁劇の社會寸陰を惜むと云ふ奇警の注意より昨年新築せし三層の樓閣は高く其の北隣に聳へたり蓋し其の擬造洋風にして靴を穿きたるまゝ昇降する事を得べく椅子に倚りて以て休憩すべく喫飯すべからしむ若し夫れ靴を脱ぎて登り靴を穿きて下るが如きは其の不便如何ぞや主人が慮と共に進みし注意とそ實に賞するに余りあり殊に其の三層の高樓の如き風景の美得も云はれず東は伊勢の蒼海を隔てゝ遥かに參尾遠諸州の山々を遠霧の中に望み朝熊の山志摩の島嶼等点々として畔中に入る西北南は即ち山峰の蜿延たるを見るべく遠きものは雲烟縹渺の裡に隱見し近きものは樓窓に當りて欣然笑を呈す津市八十餘町の人家は櫛比して眼下に集まり岩田塔世の二川は清流布を晒すが如く遠きは辛洲鼓が浦より近きは阿漕補贊崎港に至る迄皆指顧の中にあり加之ならず市中にある諸官衙諸名所神社佛閣等座して以て一々指点する事を得べ

三層樓ノ眺望

所藏ノ珍書畫

し眺望の壯なる風景の佳なる他に多く見ざる所なり殊に此の家は曾て直入對山等有名なる文人墨士が止宿せし處なれば世に珍らしき書畫類を多く藏すといふ

旅店村田屋

村田屋は一新構社の古株にして卽古一新講なり、古くて新しいとは解からぬ事ながら其の解からぬ所に妙な味かあるやら先年來めつきりと店先きが賑ひ出したといふ評判、座敷がどふとか景色か何ふとか、待遇か如何とか、書く事もなく、言ふこともなし、其の書く事もなく言ふこともない所か妙味の在る所なりとでも胡蹇化すれば胡磨化するものゝ記者褒貶毀譽の陋習を離れて公平に評じた所が、村田屋ははやるに相違なし、何せはやる……勉強……

三井銀行

東町を過ぎ左に折れ、三井銀行の前を過ぎ、十歩ならずして觀音前に出づ、

惠日山觀音寺

惠日山觀音寺は大門町にあり、當市の中心点に當るを以て群集の人常に絶へず惣門仁王樓門正面を本堂とす寺内に愛染、虚空藏國府阿彌陀辨天祇園等の堂祠數多あり櫻樹垂柳を交へ植へて景致を添ふ又堂の後に大築座と云ふ劇場及二三の寄席あり殊に夏夕は露肆氷店軒を並べ諸人雜踏夥し本尊は如意輪觀音石像秘佛伊勢順禮第十四番なり

伊勢の海清き渚に舟うけてあひあふ君をあふぐ此の寺

元明帝和銅二年二月一日阿漕浦より漁夫の網にかかりて出現し給ひ奇瑞祇聞に達し勅に應して伽藍堂塔建立ありて八百余歳を經て慶長の兵火に燒亡し其の後造立ありしものなり

國府の阿彌陀は觀音寺の境内左方にあり本尊阿彌陀佛天照皇大神宮の御本地佛なりむかし南都に覺乘上人といふ大德あり津の岩田といふ所に住し玉ふ上人本地の尊容を拜せんと大神宮へ百日の間參詣し給ふに滿する夜の夢に告げ給ふ二見が浦に來れ我相を見せ

國府阿彌陀ノ畧緣起

しめんと覺乘卽ち行く水上に一丈餘りの金色の靈蛇現し給ふ上人曰く是れ方便の御姿なり實の御神体を拜させ給へと袈裟を脱ぎて投げかけ給ふ後又七日參籠す滿ずる夜の夢に告給ふ我佛師に現して彌陀の三尊を刻みたり國府の里無量壽寺といふ寺に安置する事久し我を拜せんとなれば國府の阿彌陀を拜せよと覺乘さめて喜び彼の寺に至り僧に語るに僧も亦前夜夢の告を得たりと御扉を開き奉るに如來の妙相光明赫たり如來の頂上に袈裟かかれりいよ〳〵奇異の思をなせり此の如來は卽ち之れなり

郵便電信局津警署

觀音前の四辻の両角に聳ゆる洋館は郵便電信局と津警察署となり其の間より東に入れば堀川町を經て入江町に大觀亭あり

大觀亭

大觀亭は洞津第一の酒樓否寧ろ當縣第一の酒樓たり（旅宿を兼業す）樓は夫る明治十六年に新築せる所壯宏華麗にして三層の高樓巍然天漢を磨す樓上樓下室凡そ數十清修閑雅なるもの華飾煌々たるもの壯麗宏濶なるもの各種各樣皆風致を備へ置酒高會に宜しく喫茶靜樂に宜しく細酌微吟に宜しく歡を助くるものは則ち樓固より一隊十數個の紅裙を蓄をふ或いは曲眉豐頰或は乃ち艷容冶色或は乃ち明眸皓齒彼れ等が吹竹彈絲して清音珠を轉じ長袖を翳し輕裾を翻へして躍舞するを見て芳釀嘉肴を前にせば神飛び肉動くを禁せざらん況んや酒を行ふの酌婦も樓主常に妙齡傳美のものを擇びて之れを蓄へ皆人の指顧を引かざるはなし樓元來津市の東端にあり亭後十數頃の田園を控へて近く海岸に白砂青松の連なるを見るべし去年藤堂伯爵の來津せしや大に舊藩士を此に會せんが爲めに樓主の新築したる大廣間は廣さ三百余疊あり廣濶他に其の匹を見ざる所をす三層樓は凡そ五室にして數十疊を敷くべし有栖川宮の親筆に係かる江山佳表地の五字は筆力遒勁典雅海舟大士が手跡なる海雲閣の三字は筆鋒奇拔其他三條後藤等の諸名家の揮毫等

大廣間

三層樓

室中に掲げて扁額とし以て其の光彩を添ふ若し夫れ遠望の風色は北に流るる塔世川東に漂渺たる伊勢の海十里の光景袵席の下に萃り爭ひて美を衒ふが如し去ればなり東西都門の時めき給ふ縉紳が當地に過ぎり玉ふ毎に必ず一宿を此の亭に求め玉はざるはなく其の名を高く雲上貴人の間に馳すると其の實ありてこそ此くは名あるゞかし

扨ても觀音前の街衢は、町幅廣く巨屋軒を並べ、津市第一等の市街なり、町名を順次に擧くれば、大門町に中之番、宿屋町には、著名の富豪田端屋(田中美喜氏)あり地頭領町には西洋糕舗松屋正富あり

三重縣西洋菓子の元祖松屋正富は製菓に熱心にして常に新工風をなし雅趣珍味の銘菓を製造す今を距ること十年前大に感悟する所あり横濱に遊びて米國人某に從ひ西洋菓子の製法を傳習し玆に明治十六年始めて其の製造を試むゝ之れ實に本縣下に於ては西洋菓子

大門町
中之番町
宿屋町
地頭領町

三重縣西洋菓子元祖松屋正富

名産磯の花

洋菓マンニツトヲフラーナ

洋菓ミリシヤンコンフエクタム

發賣の始めとす爾來益々盛大に赴むき常に傭夫十數人を使用して盛に和洋菓子の製造をなすといふ當店發明の銘菓多し今其二三を錄す磯の花は當店の名産として尤も有名なるものなり蓋し伊勢の海に産する青色の海苔を以て製したるものなれば芳香甘味二つながら全く實に得難きの良菓なり殊に伊勢の海の清き渚に生ひ出でし海苔にしあれば遠國の人たちは購ひ求めて國許への土産となし花月の筵雪見の宴なぞに風流の客人を饗應する助けとするには至極適當のものにして茶酒兩筵の用に適するこそ妙ならずや又た當店が明治廿年新に發明せしマンニットヲフラーナは世間通常の煎餅と違ひ其の原質を遠く伊太利亞産のマンニットより取る淡薄にして佳味あり精神を爽快にし衛生に補益ある滋養最良のものなり同廿二年の新發明にかゝるミリシヤンコンフエクタムは最上無比の滋養品にして小兒及び病者等には其の効一層著るし是れ皆當主

分部町
岩田橋

人が多年の辛苦を積みて精製せしものなり

地頭領町より右に折れ分部町と稱す、又左に折れ間もなく岩田橋に達す、橋上左顧すれば伊勢海を望む、河口左岸には贄崎港の竿燈の高く空に懸るを見る、贄崎港は狹斜の街にして、鶯鶯燕、優柔洞、軒を並べ冶容艶色笑ふて行客を迎ふ、就中岡亭を全街の第一樓となす、壽樓及び菊崎などは寧ろ其の下に出づ、港深さ一丈寄港の艙船帆檣常に林をなす、河の南岸に製造場の屋は松に襯はれて獨り煙突の天を磨するは、去年新設の炭水社の工場とす、對岸の精米場は、四六時中機器の運轉止む時なきも、聽潮館の巨樓に蔽はれて、橋上よりは望むを得ず橋下潮來れば蒼々として深く船舶を繫ぐべきも潮水退けば砂底露はる、津市の爲みに惜むべしとす

贄崎港

精米會社

聽潮館

聽潮館は津市最新の酒樓なり、岩田橋北詰を左に入り極樂橋を渡り、極樂町の盡頭岩田川の堤上にありて河水に臨む、樓門壯嚴大廈

構造

巍然として高く外觀は洋風にして內部は和風なり、樓上二百余疊之を五室に分つ、盛宴を張りて豪興を催すに利し、樓下十數の小室を設く、淺酌細談に宜し、時に紳士の宿りを求むるあり、米客歐人至るも庖厨常に洋食の設けあれば不便なからん、本樓は元と贄崎街岡亭主人の手に成るものにして、主人其の所有なる分部町の開明樓が風景に乏しきを嗟し、換ゆるに此の新樓を以てせしものなり、館實に其の名に背かず澄淨登湧の水勢を見て鬱々の潮音を聞くべし、障を排し欄に倚りて眺望すれば回恵擺振諸山我を揖するが如く、漂渺の水、蒼々の天と相接する所、朝熊岳の高さを望む、伊勢海波靜にして白帆浮び晴明の日には參の岬尾の崎內海の口を括くり、神島突如襞口を扼するを望むべし、近く眼下には千歲山下阿漕浦上結城社の森々たる、海岸遙に辛州の崎か遠く海中に出て、青松白砂と相映ずるを見る風景の美結構の佳、我も人も間然する

風景

名産阿漕焼ノ本舗及來歴

處なからんのみ

橋を渡りて左に入る處阿漕焼の製造場あり

伊勢津名産の阿漕焼本舗は岩田橋の南より三丁ばかり東にありて主人松濤亭久八なる人古安東焼再興の志を立て嘉永二年の頃長崎にて陶製を學び其の他諸國の陶家へ傭奴となりて勞苦をなし其の後京都松風亭の門に入り熱心勉勵して陶製に苦學すること前後十數年終に其の妙術を得て製造せしに古安東に少しも劣らず因りて再興安東と世に賞讃せらるゝに至れり然るに製場の地名により世人皆阿漕焼〻稱し明治十年内國勧業博覽會に於て褒賞を得たり其の精品たる推して知るべし

橋以南を橋南と稱べ、伊豫町に入り右側修成學校の傍より、西に入る所に久留島町あり伊勢名産茄子形團扇の本　別所榮氏の製造場あり

伊勢名産茄子形團扇の本店梅盛堂別所榮は岩田橋の南伊豫町中程

伊勢名産茄子形團扇ノ本舗及來歴評判

岩田町　裁判所　立合町　辨財町

小學校の眞裏にあり抑も此の團扇は當家三世の祖先が始めて發明せしものにして爾來年を追ふて盛大に趣き現今にありては本縣の一名産として其の名遠近に轟き遠きは三府より近きは愛知岐阜等より續々其の注文をなすに至る是に於て愈々其の製を改良精撰し絹地張紙張等凡べて顧客の求めに應ず現に博覽會共進會等にて數度の褒狀を受け宮内省より調進を命ぜられたる事さへあり以て其の精良なるを証すべし然るに世の狡猾者流が其の製を摸する者あるにより凡べて當家の製造にかゝる品は其の柄に別所と云ふ印あり〻云ふ以て証とすべし

伊豫町より岩田町、此に安濃津始審裁判所あり、左に折れ立合町辨財町の長々しき町筋を行き、盡くる所に閻魔堂あり、閻魔大王巨眼を開きて南面す、堂の傍に小路ありて北へ入るべし、此の田徑を往けば阿漕塚海岸の田園の中にあり

閻魔堂
阿漕塚
阿漕町
八幡町
結城神社

閻魔堂は街道の左側にあり大像閻魔王及び俱將神を安置す昔しは坊間及村巷の入口に閻魔堂を設くるは常習なりしと見ゆ

阿漕塚往還より五六町東北の海岸にある古塚にして榎の木茂れり

俚傳に云ふ阿漕浦は昔太神宮調進の御賀の魚を漁る所なり阿漕平次と云ふ者潛に網を投して漁をなせり事發はれて罪に行はると云ふは誤りならん石碑あり芭蕉翁が發句を刻めり

月の夜のなにを阿漕になく千島

閻魔堂を一揖して、南に向ひて進み、阿漕町八幡町の、長き町筋を過ぎ、左側の大石標に結城神社の四文字を刻す、神社は之れより入る一丁許の所にあり松柏森々たるもの是れなり

結城入道道忠宗廣公は南朝の忠臣なり元弘三年奥州より參内して第八の皇子を奉じ奥羽を鎮せんと兵船五百余艘伊勢國大湊に纜し九月十二日纜を解しが天龍灘を過ぐる時暴風吹き荒れて盡く四散漂流し宗廣の船は漂ふこと七晝夜にして安濃津に着す十日許り滯留して風を待ちける中重病に罹り遂に劍を按し切腹して沒す墳墓久しく草莽の裏に埋り空しく狐兎の吊する所となりしが藤堂高兌侯之を嘆して碑を建つ自ら結城神君之墓の六字を題し儒臣津坂孝綽をして文を撰せしむ明治十三年慷慨の士川口常文氏醵發して緒紳に説て金を醵集し社殿を起して大に神靈を慰めしが朝廷宗廣の精忠を追嘉し玉ひ別格官幣社に列せらる今の社殿は即是れなり

結城神社に謁し更に八幡祠に賽し、祠前より一丁許にして、往還八幡町の盡頭に出づ、是れより藤枝町と稱し、數戸の娼樓あり藩政の頃、贊崎未だ砂洲にして、漁家數戸の寥々たりしに當りては、藤枝獨り盛華を極めしも禍福轉換盛衰忽ち地を易へ、之れに加ふるに十余年前の回祿に憐れむべし、多少の樓臺焦土に歸して、徒らに當年の情郎をして、懷舊の思を起さしむるのみ現今只山半(魁春樓)を第一とす

矢野村
加良須神社

藤水村

津の南端藤枝町より東南の方海濱へ一里余りに矢野村あり雲津川の下流二つに分かれて一州の形をなす辛州の名に應せり海岸の松林は至りて勝景にして末枝を洗ふ墨の江にもまされり此の處に稻葉神社あり俗に加良須明神といふ祭神は天津雅女雅日女命入口左右に櫻林あり小川ありて橋を架す此の海濱には二三軒の茶屋旅店などあり又海水浴場あり燒蛤の名物あり(伊勢街道へ通りぬけ)

津市を立ち出で藤水村　村に名所は成就寺　土地に住へる人々は幅廣木綿をりいだし　垂水木綿と名も高く　所々方々に賣どかや

垂水山成就寺は本尊大日如來昔は伽藍なり白河法皇伊勢行幸の時

成就寺

藤方

相川橋

雲出橋

小野江
松坂へ二里八丁

三渡驛

寺領を寄せらる元亀年中兵火にかゝれり今の堂より西十町余に大日如來出現の地と稱して靈泉涌出する處あり傳へ云ふ昔し西行法師此寺に詣でけるに小童傍の木に登るを見て(さる兒を見るより早く木に登る)と云ひげれば小童(犬のようなる法師來れば)と付けたり西行不思議の思ひをなしぬと

垂水を越へて藤方や　片樋の宮を伏し拜み　安濃と一志の境なる相川橋を打ちわたり　小森上野や小森むら　右側に列ぶ旅籠屋や茶屋の女が口ぐちに　れ休なさいと呼聲を　後に殘こして嶋貫の村のはづれは雲出川　川にかけたる雲出橋　三百に餘る四十間　縣下無類の長はしを　渡る向ふは小野江村　長さ縄手の肥留村も　歩みを運こぶ道や　道の彼方は小津村の　村に祭れる午頭天皇　流れも清き三渡の　川にまたがる宿驛は　初瀬街道の追分と　立ちたる石を三渡の　驛次とこそは知れける　ここは小さ土地なれど　往

三渡橋

來の人の絶間なく　商舎旅店軒ならべ　長き旅路に一夜さの、夢を結ぶも夥ただし　驛の中央の三渡橋　橋に名殘はなけれ共　涙川原の昔しより　松風いとゞ寒からぬ　風を孕みて出つ入つ　帆船は日々にいや増しけり

雲出川

雲出川は南勢北勢を分つ大河にして大和の境より發し矢野村より海に入る長さ十八里余足利氏織田氏等の古戰場なり

白米城

中道村に加良須神社への道あり標石を建つ

忘井

月本村に旅舎茶店あり伊賀越の追分なり

此の驛過ぎて名に殘る　市場の庄や久米村の　西に聳ゆる白米城

白米は城北畠滿雅卿應永三年に築く後足利義滿鳥屋重澄を此の城に攻む重澄白米にて馬を洗ひ寄手を謀る依て今此名あり

塚本船江打ち過ぎて　古きためしを忘井の名ばかり此處に殘りける

名所舊跡澤なれど　世は春ながら急がれて　四五百の森の黒む頃に

松坂町

櫛田へ一里十八丁

見捨て往くも多かりけり

松坂町

伊勢は津で持つ宇治山田で持つ　津と宇治山田間は松坂で持つ　此間若し松坂なくば　南勢路上觀寂寥たるを免れざるべし　蓋し當町は南勢の中央に位して　北は津市より　西は大和紀伊より輻輳する所　市街繁盛富庶にして豪戸軒を並べ　雜貨の賣買盛大なり　加ふるに近來大口港（松坂の東南二十丁許）に内海航行の小汽船寄港するに至りしより　此の町の繁華幾分か舊日よりも增進せり　或は云ふ　他日參宮鐵道落成し　大廟參拜の群客　一聲汽笛の響と共に倏忽の間　列車の上より松坂全市を一瞥して過ぐるに至らば　憐むべし岡寺山繼松寺か、荊棘の中に沒するを見んと　吾人が思ふ所は之に異なり　何は則ち松坂の今日に繁榮するもの大廟賽客の通路に當るに由ると謂ふ者　其一を知りて未だ其の二を知らざる而已　試に地圖を繙きて

松坂繁盛ノ原因

覽よ飯高飯野多氣諸郡幅員凡そ幾千ぞや　此間山林鬱乎として茂り田園穰々として實る　本郡下滝野村より以西大和國境高見嶺に至る迄　七里の間路上眼裏に映ずるもの盡く是れ茶園ならざるはなし　卽所謂川俣茶にして資質こそ稍劣れ　產出の量に至りては實に國內各郡に最たり　其他木材なり木綿織なり　凡そ近郡產する所の貨物悉く先つ松坂に致して後始めて諸方に販賣するに非らずや　此の財源にして盡きざる以上は　近鄕雜貨の集合点たる當町にして　豈賽客が緩步街上を過さらさる爲めに　遂に委靡凋落すと謂はん哉

松坂ノ沿革

當町は人口壹萬二千餘　重なる市坊の數は十二　其の昔し四五百森とて名所なりけるを　元龜元年北畠國司の家臣に　大力無双の潮田長助か始めて城を築きしより　其後天正十二年蒲生氏鄕一志郡松ヶ島より此に移り松坂と改稱せり　氏鄕會津に移りて後　服部采女正一忠　古田兵部少輔重勝相續ぎて當城を賜はりしが　元和五年紀伊大納言南勢四郡を領して津の藤堂と封を接へ　城代を此に遣して在鎭せしめけり

飛彈ノ守ノ烟眼

傳へいふ　氏鄕の地を此に相するや以爲く　地形狹しと雖も船江に續きて他日民戶の繁殖するあらんと　飛彈守の烟眼三百年の昔日に在りて　既に松坂の今日を洞視せし者か

南勢由來多美人

玆に吾曹は特筆して讀者に告く　今の在米特命全權公使陸奥宗光氏か　前飯高飯野郡長土井光華氏に贈る詩に曰く（却羨風流小郡宰南勢由來多美人）と抑も山水秀麗の地常に美人を產すとかや　行客須らく注目すべし當町以南宇治山田に至る各戶妙齡の女子　髮の結び樣　衣服の被こなしこそ都雅ならざれ容顏天性色白く　眉目嫻妍晒さずして淸き雪の膚　蓋し天性水質の致す所　彫琢を用ゐずして名玉自ら光あるもの耶　記者嘗て一書を著す　伊勢人を評して曰く北勢男子多剛强南勢婦人多麗質　と移して以て　看客か一喙に資す

川井町

春木屋

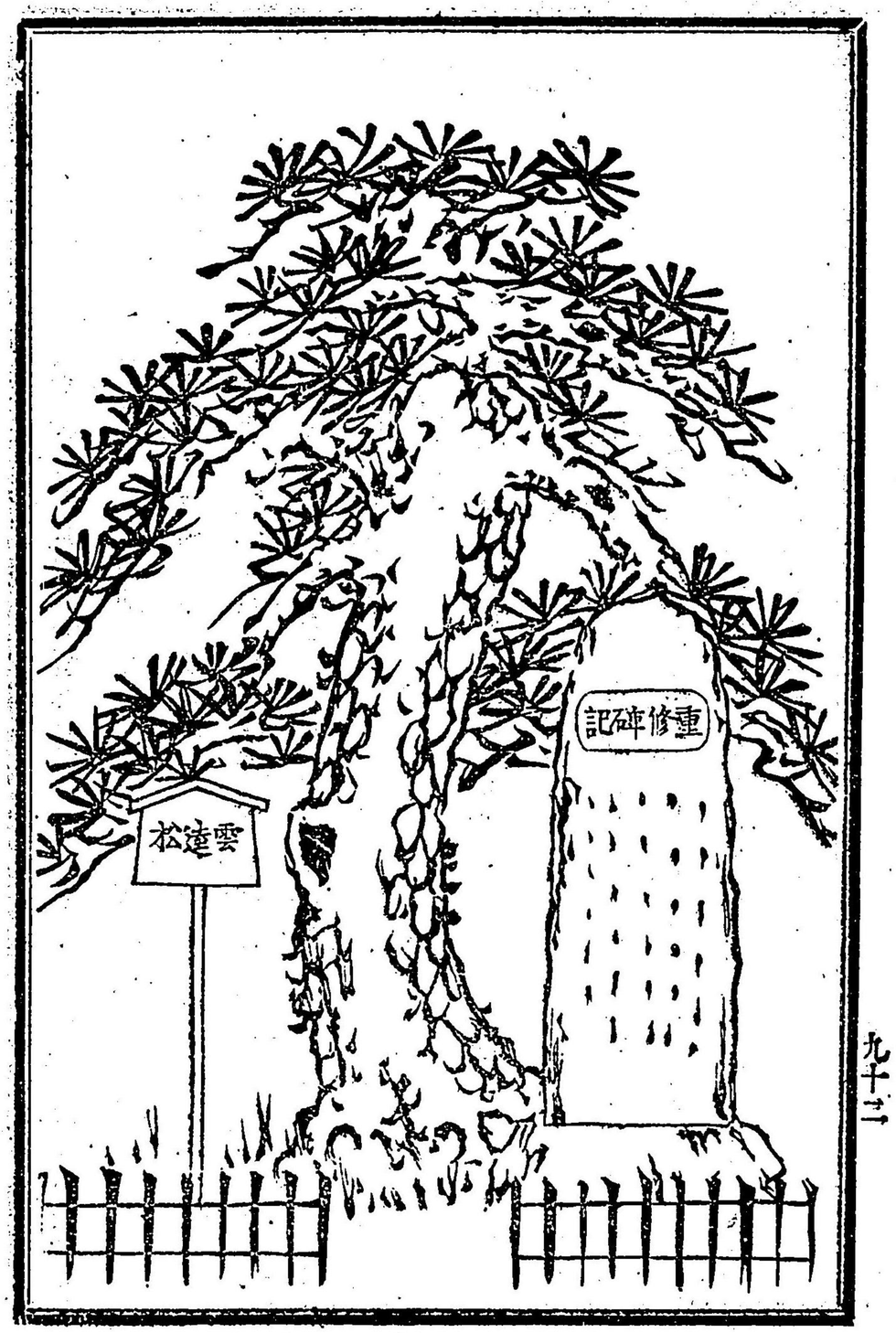
呵々
閑話休題　松坂町の北の入口を川井町と稱す　酒樓妓院軒を並べて
絃歌湧くが如く　冶容多くして遊客毎に群集す　中にも名だゝるは
春木屋と殘月樓となり
春木屋は樓宇の宏壯なる松坂全市に最たりといふ疊數は三百余疊
表の入口より裏口まで一直線に細庭を通じ乘車の儘貫きて馳すべ
し亦樓主が奇警の注意とこそは評すべし後樓は一昨年增築せしも
の丶山にて一望開豁なる田畑を見下し右に見渡す山々は布引山や
白米山堀江山は突兀と高く聳へて四下を睥睨するか如し左を顧れ
ば綠樹民屋の參錯する其の中に一丘獨り抽きて方木の鬱然たるは
是れ即松坂城趾なり凡そ此樓唯風景の美を萃むる而已ならず修飾
壯麗清雅を旨とし孔雀の間鷹の間なと氣最たり中にも孔雀の間の
床に掛けたる松に孔雀の大軸は對山の筆遒麗古雅の稀品たり語を

殘月樓

寄す風流の客山眉柳腰をして管喉珠を轉せしむるの快と共に天然
妙景を弄するの清趣を兼有せんとするもの一たび此樓に來れ
殘月樓は通稱をすし鉄と稱し割烹豊美多く細腰を蓄ふ上流の愛顧
を辱る丶所骨て齋藤拙堂此家に飲み會せ樓宇の新成に際し記念の
爲め殘月樓の三字を書す是れ即　名の起源にして其の扁額は今尚
主人の愛護する所たり

旅店大須賀屋

扨又旅店には
唯見る右側の大廣軒頭に賴山陽の筆とこそ言ひ傳ふる大須かやて
ふ屋号の看板を掲けたるは繁榮なる旅店にして座敷の數は拾有八
疊の數が三百と聞く近來修繕を加へ飲食器物等潔清を旨として顧
客の取扱を叮重にし廉價を以て只管其の利便を圖るといふ
川井町を過ぎて西町や　義僧安念法師が紀念碑は未だ着工の時至ら
ざるも　標木を立てて行客の指目に觸しむ



大信寺

義僧安念僧正

西町 大橋

本町

松坂の里に著名なる古跡は六歌仙の一人物中院遍昭僧正貞觀十一年に一宇を創し大信寺と名け今に木像を安置し年々開基會執行せり郎内に老松あり雲達松と云ふ其の下に寺記を存す四代の主義僧安念あり順德天皇の朝に當り北條義時が陪臣の身を以て暴威を畏ひ天皇を滄海に遷し万民を塗炭の内に苦めしを憤り偽泉親衡等と北條氏を討滅せん事を謀りしに不幸にして事果さず建保元年八月十六日死す僧正傳ふる所の筏及び阿彌陀佛像獨存し安置し奉る

西町は御路漸く曲り やがて大橋に達すべし 此川通稱は坂内川水源は西二里餘坂内村より來り 下流は凡そ一里にして東海に朝宗す平日水涸れて運輸の利便なきこそ一大遺憾なれ 大橋を降れば之より は當町の中眞 尤も繁庶の境にして所謂本町是れなり 本町の盡頭一街の東西に走るものあり 茲に四辻を爲す所日本第一富豪家三井氏の宅あり 去ぬる明治九年の暴動に亂民の放火する所となり

三井家ノ來歴

其後改築せし者にして家屋壯麗の慨なきは質素の家風却て奥床しく三井氏の今の主人は復太郎と稱す抑祖祖天運にありとは云ふものゝ豈豎不肖によらざらん今乞ふ三井氏の祖先が家を興したる來歴を概述して其の然るを証せん三井氏の遠祖は越後守高安と稱し當國安濃郡に住し富田信濃守が家臣たり高安の第四子八郎右衛門高利幼年の頃京都の商家三井三郎左衛門の店に奉公す或年主人に隨ひて江戸に降り居折三郎左衛門其の性の悧悧なるを見て是を試みんと欲し錢三貫文を與へて何にても心付きたる商をなせと命せしに八郎右衛門命を奉じて出て行き日暮に至りて五貫文を携へて歸り主人の前に低頭す三郎左衛門尋ね問へば八郎右衛門答へて日本橋こゝ第一繁華の地と見受けて候へば給はりし錢にて柄袋引肌等を仕入れ橋上に佇みて往來の者へ販ぎしに斯くの利益を得て候といふ三郎左衛門感じ之より目を懸けて使ひ後程元服せしめ店

向を務めさせけるが器量抜群なるに慧心を抱き銀五十貫目を八郎右衛門に與へて年來の勤勞を賞じて暇を遣わし舊里に還らしめ三都へ開店する事を禁じけり斯くて八郎右衛門は舊里に在ること數年大に資本を蓄へ時機を待ちける中三郎左衛門沒するや否や江戸に呉服店を開き越後屋と名乘りける當時の習ひとして振り賣りの外は皆掛賣なりしが償わざるもの多く成り行きて扨てこそ現金賣りとなりけるに尋常にては利を得ること難ければ越後屋にては現金安賣といふことを始めけり後三井九郎右衛門の代に駿河町に表九間に四十間の大店を開き種々の呉服をは一種に付一人宛の手代にて捌かしめ仕立物は使待たせて縫ひ上げたれば大に繁昌して日々の賣上高百五十両に達せしといふ三井の苗字は主家より讓り受けたる由にて兄弟の者六人六家に分れたれ共各店誰の持物とも定めず六家の共有とし八郎右衛門八郎兵衛三郎助等兄弟の名後には

役名の如く成りて血縁の親疎を論せず常に八郎左衛門を本家とし相續は次座の八郎兵衛三郎助等より順次に進むの法とし衣食以下日用の費用は毎年定額を設けて六家の主人と雖も私に恣にすること能わず商法上の事は六人の伴當月々會議決行するの家法なり是れ三井家の幾年を經るも家道衰替せざる所因とす貞享年中幕府の用達を命ぜられ更に爲替方を務め吳服木綿店は江戸の両店にて一日に千両づつの賣上高に達し諸國出店の手代は其數千を以て算ふるに至れり後維新の初首として多額の金を獻納し貿商社爲替會社後に第一銀行私立銀行等を興し物産會社を立て育兒法を企てし等美事枚擧に暇あらず

魚町

四辻より右すれば魚町にて　此に郡役所高等小學校及山室分社あり

山室神社

山室分社は社殿清楚然たり　本居宣長の分社にして　翁が佩刀を神主とし　平田篤胤を配祀す　山室本社は松坂の西南九を二里許

なる山室村の妙樂寺翁の菩提所にあり翁の家は魚町にありて五世の孫建亭氏は即今の主人なり

本居宣長の遠祖を平賴盛とす賴盛の苗裔伊勢に來り北畠國司に仕ふ北畠亡びて後其子孫松坂に來りて賈人となる宣長少時産業を事とせず京師に遊びて醫術を修め寶暦七年松坂に歸り小兒科醫業を開く難波の契仲阿闍梨及加茂眞淵の書を讀みて感あり發奮皇學を修す著書若干卷紀州侯屢召して古書を講せしめ恩遇殊に切なり翁の名隨ひて世に布き來り學ぶ者頗る多し宣長深く心を王室に存し古典を攻め書記を諳じ神道教を說きて儒佛を排す其の教科に用ふる書は古事記日本書記古語拾遺等とす嗚呼微々たる一匹夫と雖も誠心精意の發する所大に尊王敬神の思想を當時の士人に注入して冥々の裡に王政復古の大業を翼贊せり亦偉ならずや宣長鈴を愛玩し多く古鈴を集め屋号を命して鈴屋といふ最も歌道に邃し寛政二

年六十一歳の折自ら像を寫し一首の歌を添ふ

師木島の大和心を人問はゞ朝日に匂ふ山櫻花

山宮社を一揖し社域を出て右に眺むる城趾は　卽浦生か古城にして

明治十年火災に罹り殿閣盡く灰燼となり　十四年當町有志　諸に

よりて公園となれり　園は高塁にして嘉草を植へ紅綠美を競ふ　西

北最高の所には南龍神社（德川賴宣公）あり　殿閣の趾には考祥館

あり　松坂金市を脚下に臨み　伊勢海蒼々前に當り　漁船の黑煙を

出して馳する　帆舟の白翼を張て進む　宛ながら盆水に小魚の浮ぶ

如く水を隔てゝ尾張の國が尾を出し　三河の國か頭を顯はせる風景

の妙得も言はれず　扨も本町よりは中町や　米屋鯛屋は有名の旅店

にして　柳屋松屋は著名の糕舗なり　中町の入口より左に入れば

觀音小路の正南に岡寺山繼松寺あり　眞言宗高野山運華三昧院の末

刹にして　本尊は如意輪觀世音三尺二寸の立像なり（度曾郡二見の

公園

中町

岡寺山繼松寺

漁人三津正信の海中より拾ひ上げたる所なりと云ふ）本堂西向き廻

間半に四間　毎年二月初午節に近鄕の群衆參詣して　二十五歳四十

二歳の厄を拂ふ　靈驗著明なれば賽客雜沓して松坂金市立錐の餘地

もなし

米屋甚右衛門

米屋は當町中町にあり有名なる旅店にして遠近の來客夥しく當町

屈指の旅舍なり今其の來歷を聞くに當米屋甚右衛門は元龜天正の

頃當國飯高郡大河內の城主北畠氏の家臣奥野某の後裔なり織田信

長公の大河內城を陷るゝの時戰死す其の子逃れて農に歸し後數世

を經て松坂に出で米商を營み大に利を得たり依りて米屋と稱号し

同驛中町に轉居し始めて旅人宿を營業す當主に至る迄十二世二百

五六十年間子孫相續して同業を營み大に繁榮を來し關東奥羽信甲

諸州京坂江濃尾紀の諸州及び北勢等の旅人は定宿として來泊する

もの頗る多く維新以來邇久宮殿下を始め九條公佐賀侯其の他華族

菓子商柳屋奉善
銘菓越ノ雲

菓子商松屋
銘菓鈴の屋づと

旅店鯛屋

の來泊するもの十有七人に及び近時益盛大を來せりと云ふ

柳屋奉善が近來製する菓子銘越の雪老伴は原質製法共に好良の廉を以て奈良京都等の博覽會にて褒狀を得たりといふ嘗て畏きあたりの御用を蒙り名を高く九重の上に馳するとかや

松屋に販く名糕鈴の屋づとと稱するは鈴の屋大人か集へられし古鈴を見まはしといふ人多きより當店主人か遠國の家づとにもと其の形を菓子に物せしなり佐々木弘綱氏の歌を添ふ

是そ此名に飛びきたる鈴の屋の鈴をうつしゝ鈴の家つと

旅店鯛屋は中町三丁目西角にあり五十余年前の開業にして一昨年向側に洋館造の一樓を新築し三層の構造にして六十余疊を敷く樓名を神風樓と稱す嘗て小松宮の休泊し玉ひし由にて旅客の取扱親切なる上等の旅店なり今の主人は神道黒住派の熱心なる信仰者にし敬神の心深く慈愛の情に富み律義正直にて人を親愛す此頃老母

日野町
勢弘社
紀州街道の追分
樂器工長尾芳造
湊町

某御陰參りの貧窮人に施さんとて鞋數万足を貯へ置きていたわしき者通ると見れば呼び留めて施すを記者現に之を見て其の世に珍らしき仁心に感歎せり一家眷族斯かる善良の人々なれば家業に勵精〻旅客の爲に萬事親切を旨とせることは推察するに餘りあり

中町過ぐれば日野町や　天正の昔し江州日野の商人角屋源右衛門衣屋與兵衛來住して　蚊帳疊表類を賣りしより此に一衢を起し來りて

古郷の名を其儘に日野町と稱すとかや　此町の人口四辻の角に三層樓の突兀として嵩高く雲際を磨するは勢弘社　此の辻より右に折るれば黒田町　是れ即紀州街道の追分けぞ　眞直に進む本道の左側に新築〻たるは多賀神社の分靈ぞ　日野町過ぐれば湊町に平生町

登記所は近頃新に築造し　樂器工長尾芳造氏が千辛万苦の末に製法發明功成りて　盛に興せし風琴製造の工場も港衛の近隣にあり

扨茲に有名のものを擧ぐれば　湊町には酒樓兼宿泊店に　すし虎

平生町

すし虎
回春樓

あり糕舗に老伴亭藤村景嘉あり　而して平生町に伊勢名産白梅煉油本家すか屋あり

すし虎樓名は回春樓と稱す去ぬる明治十三年　聖駕太廟に詣で玉ふとき今の司法大臣山田顯義伯供奉の列にあり　當家に投宿せられし際後樓新に成る　主人卽伯に請ふに樓名を擇ぶことを以てす伯自ら回春樓の三字を書して與へらる　儒生谷庸之を記して曰く　蓋活死回生之意也猶草木冬時枯死逢春陽萌芽發生焉耳今用以爲樓名則特覺斬新云々　扨も當樓主人は奇人にして深く書畫を愛玩し力を盡くして集めらたる多くの珍品の中に有栖川宮の席上揮毫に係る風花雪月の四字赤松連城師か致和發祥の句等は姑く措き無類の稀品と稱すべきは鶴性松心の四字を神山君廉谷鐵眞江馬天江等の四名家が一字づつの寄せ書にゞある主人又近頃吉田松蔭以下幕末英士の筆跡を集め得るに從ひて藏すと謂ふ風流の客此樓に

無類ノ稀品

菓子西村景嘉　老伴亭藤

老ノ伴來歷

銘菓五十鈴川

過ぎりて一見し玉へかし

老伴亭藤村景嘉は嘉永四年の開店にして名菓老伴の本舗たり開く慶應二年景嘉の朋友三井勝右衛門氏贈るに東漢の古瓦を以てし其の形に摸して菓子を製せしむ是れ卽名菓老伴にして戴星老人（卽則石衛門氏）爲めに白香山の句（談交唯對水老伴舞如鶴）を錄せり夫れは明治十三年主上御通輦の際叡旨に叶ひて御注文を蒙り其翌十四年には內國勸業博覽會に於て菊紋褒狀を得たりさるを世の荻猾者が僞製して濫りに本舗と稱するものあるこそ遺憾なれ景嘉氏近來發明したる菓子銘五十鈴川及御裳濯川は雅味と風致とを無有する好製菓なり

千とせへし木の下くゝる五十鈴川水の色さへときはなりけり

神宮々司正六位鹿嶋則文

皇神の御もすそ川の流れにゞひきくらふべきものやなからむ

白梅本店須賀屋 森川吉郎兵衛

従五位鈴木重嶺

平生町須賀屋（森川吉郎兵衛氏）は勢國名産松坂油しち梅並銘菊梅香の本店にしてしち梅煉油は元文の昔し當家の祖先製法發明以來特々幾百回の經驗により原品を精撰し製法を改良し玆に累世の久しき江湖の信用と賞美とを博し販路益擴張し京坂は勿論諸國より伊勢大廟に參拜する旅客の歸路必ず家鄕の土産とするに至り白梅の名聲遠近に及び遂に此地の名産となれり然るに近來他の製造家往々類似の煉油を製ししち梅の名を附して販する由是亦本店の名譽なりとは言ひながら或は恐る他の粗製濫造の類似品と本店の製品とを混同視せんことをされば去る明治十七年商標條例頒布の際直に登錄商標を出願し爾後特許の商標紙に包み以て本店の眞製を証明すといふ其他銘菊梅香及各種の煉油何れも原質精撰は勿論價も極めて廉なれは愛顧の諸客平生町の森川姓須賀屋と尋ね玉へ

愛宕神社 鈴森神社

菜花樓

平生町を打過ぎて小川に架せる石橋を渡れば即愛宕神社や鈴森社　鈴森神社の祭神は少彦名命とぞ聞く　此町は花街にして酒樓両三軒を列べ風雅の樓客が手車を繁く所ずかし　中にもはけて繁盛なるは菜花樓なり

菜花樓屋号は今を去る百有余年前清客某か名けし所其後日南憑雪卿二家の此の三字を書せし扁額の手跡は各優雅の妙を有し殊に藤森弘菴先生が安政の頃に三井氏の介により此の樓に登りて筆を執りし樓名の額は樓主の愛藏する所當樓は其名を遠近に馳せて噴々騒客の贊稱する所なり後楼に登觀すれば堀坂の高嶽崔嵬として前に當り山勢委蛇として其の左に連る松坂の市街は蜿々長く延びて右の一面を擁し正面は眼界開けて遠く山巒に玉る迄一望幾里の間用悠悠窮處々綠樹の其の間に點綴せるあり若し夫れ暮春の候に當りて菜花皆開きて宛然黄金氈を布く如く青々たる秀麥と相映じ

て妙景得も言われず菜花樓の名實に空しからずとす將た又冶容艷色多くして緑竹に熟し和洋庖丁擬梅妙にして佳味口に適し櫻宇壯麗修潔にして清楚愛すべきは當樓兼ねて之を備ふ殊に洋風割烹の如きは當町未だ其の匹を見ざる所雅客就て試み玉へ

藤ノ棚

愛宕町より垣鼻や　松坂市街も是れ限り　藤の棚なる驕の木は　枝幹屈曲蔓延して空を蔽ひ　盂夏開花の其の折は　紫雲天に聳びきて心なき童さへ　足を停めて觀るといふ　足を停むはよけれ共　軒を列ぶる白酒の　女の呼ひ込む甘口の　口當りよきまゝ飲み過し足をば取られ賜ふなよ

櫛田

明星へ一里十二丁

松坂越へて垣鼻や　金剛川を打ち渡り　下村上川の村に　川はなけれど年々に　神の惠みの豊原村　ここに名高き厩人宿は　紅葉屋中島屋二店なり

紅葉屋は一に秋錦舍といひ又老樟軒と稱ふ今を去る二百余年前の創業にかかる主人九郎兵衛恒良恭謙の性なれば顧客の待遇いと親切に殊に雅致を貴び家屋の構造其の他万事に頗る結構を盡し屋號にちなみて紅葉の間てふ一の宏大壯麗なる一室を設け貴客を請ずるも耻しからざれば群り集ふ客人に滿足を與ふること大方ならず

旅店紅葉屋

紅葉ノ間

家の前面に式内大櫛神社あり九郎兵衛茲に二株の柿樹を植へ奉り日頃之れを愛みつつありしが此の樹の年々に生長繁茂すると共に此の家の繁榮年に日にいや増して太に諸國に高評を博し遠近の諸人大廟參詣毎に此の屋に宿りを投じて紅葉の間と繁茂せる柿樹とを賞せざるはなし爾後子孫相受け繼きて今や昔しに變まさり顧客は一層の特待をなし家屋器具に改良修繕を加へたれば此の屋の聲

大柿樹

旅店中島屋

櫛田川
稲木

價は亦昔しの比にあらずといふ

中島屋は眞成講社なり主人源兵衛探沈にして德義を重んず始め櫛田の川東に開業し勉めて價を廉にし畫食の顧客を請ずること最も多く日に幾百なるを知らず一度此の屋に休泊するものは必ず通行の度毎に寄らざるはなし是に於て日に月に來客の數を增し盛春の頃には畫食の顧客出入絶へず恰も蟻の集るが如く人もて山を築くばかり實に立錐の余地なきの繁榮を來せしより客室の狹きを感じ明治廿三年壯麗なる屋舍を川西に造營せり即ち今の家屋之れなり爾來一層の勉强を加へ顧客の待遇に注意を加へ舊事新奇改良を旨として營業することなれば休泊の旅人に便益を與ふる事亦少なからざるべし

南に流るる櫛田川　昔し齊宮此の川へ　櫛を流せる故實とて　名物良の儘に變なく唯だ幾年早馬瀨村　稻木と云へる處壺屋紙なる

百〇八

伊勢名產紙煙草入本舗池部清兵衛氏

紙煙草入ノ來歷及沿革

なる光る紙製の　煙草袋の本舗こそ　池部氏とは知られける

當村の入口北側　櫛田川より五丁　稻置神社のほとり壺形を染め出したる暖簾を垂れたるは是れ卽ち當國特有の名產紙煙草入の本舗池部清兵衛氏なり抑も紙煙草入の淵源は富家七八世以前の祖先が合羽を賣り捌き居りし際油紙の能く乾濕の防禦に適するより思ひ付きて製造せし處其の發明は遠く寶曆の以前にありといふ當時壺屋を以て屋号とし製する所の金具に壺形の記号を打ち出せしが名聲次第に世に布くに從ひ漸く製法を改良し明治維新の後に至りては唐皮に偽し色彩を施す程の進歩を致せり然るに中世製法の他に漏れて當村以南沿道の各村及宇治山田町に至る迄同業の諸店漸く增加し公然壺屋の名號を濫稱し壺形の記號をさへ用ゆる者輩出したるこそ不敵なれ然れ共本店の名譽と信用とは爲めに少しも減せず現に去る明治六年墺國ウサンナ府万國大博覽會にては褒賞を得十一年佛

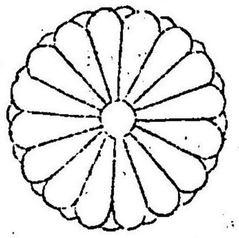
百〇九

池部氏ノ光榮

國ハリ府の万國大博覽會に於ては賞牌を得たり又内國に於ては明治十年の第一回内國勸業博覽會に上圖の如き鳳紋賞牌を得同十四年第二回内國勸業博覽會にては褒狀を得たり其の他本縣及他府縣の博覽會には出品毎に褒賞を受けざるはなし池部氏の光榮も亦大なる哉然るに數年以前より本店以外の壺屋は皆其の形壺記號の上にさゝらはしき符號をつけて本店の記號に別つに至れりされば眞正發明の根元たる壺屋の本家を知らんと欲せば唯壺形記号に一点一畫をも添へざる此の池部清兵衛氏を擇ぶべきのみ

稻木を過ぎて桜川　昔は勅使を此の川に　迎へて禊を修するの　式

紙煙草入竹八



機殿

齋宮舊跡

を行ふためしあり

當村北側（櫛田川より十八丁）名產紙煙草入製造所竹八は敢て壺屋を僞稱せず判然自家の名號を稱し製品の良好を以て信用を得たりされば博覽會にて菊紋褒賞を得たりとなん

命剛柔や竹川の　左にあるは機殿ぞ　天照神の御衣を　織るてふ古き事柄も　今は記するに暇なし　齋宮村の大道の　北なる森は是ぞなん變昔し齋宮の舊跡ぞ

神服織機服神社は多氣郡大垣内村にあり祭神伊刀麻神麻乃方神

神麻續機殿神社は飯野郡井口村にあり祭神麻續良姫命

昔し太神宮飯野高の宮に遷行ー給ひしゞ機殿を長田卿に營む白河院のゝ井手の卿に定めらるゝの両機殿之れなり四月九月毎に紺布の神衣を織りて内宮に獻すること後花園院の比迄は嚴重なり

齋宮とは昔天子御即位毎に卜定の式ありてそれにかなひし皇女を

こゝにうつし給ふ宮殿なれば官舎の數多く備はりたり皇女の都を出でさせ給ふ時を獅宮群行と云ふ此の獅宮の事は垂仁天皇の時に始まる其の頃は五十鈴川のほとりにありし景行天皇の時多氣の卿へうつされ方域四丁に官舎を造營し竹の宮と稱し代々の齋内親王こゝに座す後醍醐の朝兵亂により絶へたりと云ふ

明星下有爾早過ぎて　新茶屋村には三忠に　紙煙草入賣るぞかし

新茶屋村に通稱三忠と稱する壯麗なる紙煙草入製造發賣所あり壺屋〳〵と紛らはしき店も多き中にかゝる狡猾の手段を用ず判然自己の名稱を以て芳名を遠近に馳せ殊に原質を撰び製法に心を籠め紙質の好良と意匠の卓拔とを以て同業者中に頭角を顯はせりされば去る明治十年縣内物産博覽會及同十四年の内國勸業博覽會に於て共に褒狀を得又明治二十一年十月西班牙に開設せし万國大博覽會に於ては金牌褒賞を得二十二年十一月佛國にて開設せし同大博

明星

山田へ二里十六丁

紙煙草入賣捌
三忠商店

三忠ノ光榮

三忠ノ新發明

明野ガ原

覽會にては銀牌褒賞を得遂く其の名を泰西に傳へたるこそ面白なれされ共是は壺屋紙の應用上從來有りふれたる事にして別に斬新の意匠にはあらずこゝに特筆大書して江湖に告ぐべき事ありそは即ち當店主人が多年潛思の結果として此の頃製出したる諸品にぞある雨天に用ゆる洋製の外套は柔なる事護謨製に異ならず諸種の靴類は色澤皮に見まがうばかり手提革嚢は革よりも風致あり此の外人力車用の布衣及改良器機附下駄ゾヽ掛等は壺屋紙とはいへ紙質油質製法等皆新發明のものにして當店獨特の秘技なれば專賣特許出願中なりと云ふ之れ等諸品他日果して實用利便に供するに至らば僞造紙の應用上一新工夫を開創せるの偉功誰か嘆美せさらん

新茶屋越へて行程に　道の左の明野原　舊と廣漠の原なれど　近來大に開墾し　三重縣勸農場となり　製絲の場や養蠶の　傳習場の其の他に　獸醫講習所を設け　又牧場を設置して　牛馬雞豕を牧畜し

小俣村

旅店木屋長兵衛

日々に開拓怠らず　二百八十一丁余の　田畠は已に功なれり　行ば間もなく小俣村　木屋長兵衛が旅宿なり

木屋は當村にて尤も有名なる旅店なり其の祖先森村長兵衛氏は世々北畠氏の臣なり北畠氏滅亡の後所々に流寓し遂に居を小俣村に卜し始めて木村商を營み第二世にして旅舍に轉業し以て屋號を木屋と稱す元祿四年歳八十にして沒す之れを近代の祖となす傳へて當世に至る迄凡そ十世同業を營み來る當主幼より士氣あり各藩兵制を改め農兵募集の時に當り奮て募に應じ明治三年和歌山に至り歩兵伍長に任せられ尋て神戸港警營和歌山藩備所に出仕す後官を辭し父長兵衛氏に次きて益家業に熱心し近來大に家の面目を改め客室美にして家政整ふ而して上は皇族大臣より朝使華族の神宮に詣つる時は神宮司廳より爰に送迎し下は遠近各國の旅人常に群集し愈々繁榮せり因に云ふ文政十三庚寅年閏三月十五日大坂心齋橋

宮川ヨリノ里數

宮川

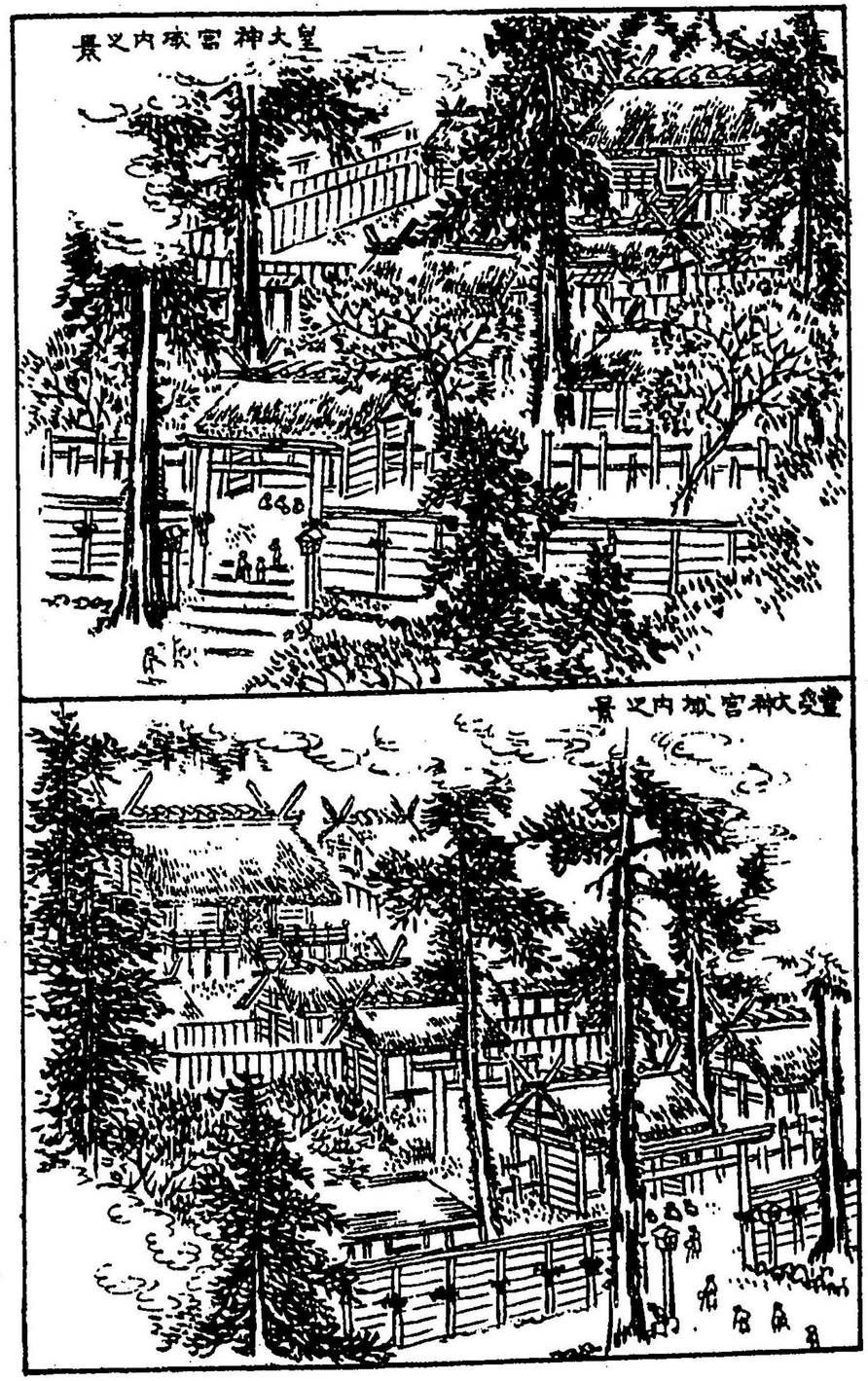
節同行十一人御陰ぬけ參り並に仝時丹波國福知山安場村大神宮を蔭々記したる二本の柄杓當時客人より貰受けしもの今に當家の土藏の地棟に納め置くといふ

小俣村の盡頭に　流れも清き宮川や　幾夜旅寢を重ねつゝ　早や神都へと着きにける

宮川より外宮の入口北御門まで三十町　內宮に至る一里半　二見浦へ二里三十町　淺間山へ三里半　神社港へ一里十町

川內參宮沿道並ニ近傍ノ記事

宮川　別に度會川　豊宮川と稱す源を紀伊大和の國界なる大臺ヶ原山に發し多氣度會両郡の諸溪水を合せ北流して大湊（宇治山田市を距る北方一里余に在り）より伊勢の海に注ぐ長さ凡三十三里水清くして流速し



上下ノ渡

蓋深淺廣狹の差隨處に多く雨水滿漲の患時々至るを以て其の舟揖灌漑の利便は未だ以て足れりとなさず而れども其の宇治山田町（醫來は山田と宇治とを區別したれども明治廿二年地方制度の改革以來斯く合稱することゝなれり）の西を流れ兩太神宮に參詣する諸國人の毎に渡過する所となるが故に頗る著名なりとす而して町に近き堤上には幾多の櫻樹を植え且つ水光山色の絶佳なるにより春より夏に至り遊人い此に逍遙して心目を洗ふもの陸續として絶ゆることなし

新古今集

契りありてけふ宮川のゆふかづら永き代までもかけて頼まん　定家

此川に上下の二渡あり松坂より小俣にかかりて來る人は下の渡り（昔時は船渡しなりしが今は架するに假橋を以てし大に通行の便を致せり聞く參宮鐵道設布の後は二渡場の中央に堅牢なる木橋を架するの計畫なりと）を越えて宮川町（宇治山田町内の大字なり以下之に同じ）に入り田丸より

筋向橋

宮川町
茶屋町
堤世古

常盤町
下中之卿町
八日市場町
一志久保町
宮後町
吸霞園

川端（熊野街道と呼ぶ）にかけて來るものは上の渡を過ぎて中嶋町に入る是より呼で川内といふなり

筋向橋（すじかいばし） 常磐町に在り小き橋なれども宮川なる上下の渡より來れる人々の落合ふ所なるを以て名高し蓋國道を取る者は宮川町より右に折れ京町を過ぎて中嶋町に出で東に向ひ二俣町浦口町を經て此に至ることなれども大抵の人は然せず宮川町を直進し茶屋町、堤世古（此の地にて世古といふは他所にて小路と云ふが如し）など云へるを過ぎてここに來るなり此の橋を渡れば旅舍あり商店あり常盤町、下中之卿町、八日市場町一志久保町宮後町を經て館町に至る數町の間人家稠密にして市街繁華なり

吸霞園は一志久保町にあり門内両側に梅と櫻を並べ植へて觀を添へ料理宿泊を兼業し當地に無類の西洋料理を營みて顧客の需めに應じ且つ球突を設けて遊戯の用に供すと云ふ其の後園は廣く芳草

中岡樓

珍樹を雜植し園中の茶亭は高く石もて積み上げたれば亭上の眺望殊に佳なり醉後緩歩して清風に亭に浴し芳茗を喫するは眞に雅趣なりとす

八日市場なる菓子商立花屋の角より右に入ること半町許正面柵門の上に燈燈を點じ門柱大標を掲げて即席料理中岡樓と題せるは是れ遠近に名を轟かせる料理店與可樓なり抑も當樓は三世以前に開業せし所なるが割烹の高妙なること殆んど當町に獨歩たり即ちやんごとなき方には小松宮を始めとし九條殿其の他貴顯の二見浦等に來遊せられたる折毎に庖厨の任を辱くせりされば當町師職の家に貴客ある際には必ず仕出しを請負ふのみならず十數里を隔てたる志州の各地及其の他の地方に吉凶の大禮あるや必ず當家に料理を托すといふ蓋し當樓が庖丁に名譽を得たること斯の如くなれば愛顧の貴客常に多く去年七月改築したる樓宇は宏壯にして修潔

館町

宇仁館

四十余疊の大廣間を始め數十の室皆修飾行き届きたる中にも藤原宗則が筆なる同他與可樓の扁額は即ち樓名の起因にして其の後清人衛鈴生が主人の嘱に應して亦此の五字を書せり其の他茶山の書釣玄が彩畫等皆稀に見る所なり後樓は岩戸の山を控へて竹林蒼々山腹に茂生す若し夫れ雪降るの日風色與に愛すべしといふ

館町は外宮々外の市街にして一に廣小路と稱す道路端正にして幅廣く商賈店を連ね旅舍軒を竝べたり參宮人にして特に厚待せらるるを欲せゞ偏に宿料の廉なるを望むか或は只管參拜の時宜を謀るときは此處に宿泊するも亦可なりとす

外宮前に三層の大厦高く聳へて天を摩するは有名なる旅館宇仁館なり本館は去る明治十七年の新造なれば座敷の結構等便利新樣を旨とし殊に屋高くして咫尺に外宮の御山に對す客人の取扱ひ丁寧親切にして主として旅人の便利を計るが故に賓客の止宿を求む

るもの甚多しといふ

北御門　外宮北方の入口なり參道は一の鳥居へ廻るを本儀とすれど道の便宜に從ひてここより入るを常とせり

外宮

豐受大神宮又度會宮と稱すこの御神の五穀を始めとして生物繁殖のことを總べ守らせ給ふことは普く人の知るところなり

抑當宮御鎮座の起原を溫ぬるに人皇廿二代雄略天皇廿二年九月（天照大神の五十鈴川上に鎮まりませしより後四百八十二年）丹波國の與謝郡（今は丹後に入る）眞名井ケ原よりここに移らせ給ふ是天照大神の御託宣に因れるものなりとぞ　南方一帶高倉山に接し樹木鬱乎として太古の瑞色を呈し其の宮域の幽邃閑寂なる何人か此に詣でて尊嚴淸淨の感を發せざらむや

續後拾遺　掛卷もかしこき豐の宮柱直き心をそらに知らん　俊成

玉鉾百首　朝よいに物くふ毎に豐受の神の惠を思へ世の人　宣長

別宮

高宮
土宮
風宮
月讀宮

天ノ岩戸

別宮四所　高の宮。土の宮。風の宮は各宮中本殿より南の方に在り月讀の宮は宮外宮後町北端の森にあり月夜の命、荒魂の命の二座を祀る宮中に遙拜所あり

御供所、御神樂所、大麻授與所、は相並びて宮中に建てり各其の名の事を掌る其の他參集所（神官の主務室なり）御厩（神馬を養ふ所）等あり又山を上ること西南八町許にして高倉の岩屋といふあり昔時は天の岩戸と稱し諸人に參拜を許せしが其の附會人を誤るを恐れ後之を禁せられたり考古家の鑑定に由れば正しく上古の古墳ならんといふ

一ノ鳥居

清盛楠

一ノ鳥居　參宮の本道第一の鳥居といふ參宮人たるもの館町を過ぎて右に折れ橋を渡りてここに至るを本儀とすれど北御門より入りたるものは參拜を終りたる後此處に出ずるなり。鳥居の近傍年古りたる楠樹あり俗之を淸盛楠といふ。昔小松內大臣重盛勅使として參向の時冠にさわるべしとて西にさし出たる枝を伐らせら

外宮神苑　廣サ一萬五千坪

宮神社
勾玉池

岡本町

宮崎ノ風景

れし事ありしを里俗誤りて斯くいひ傳へしならんと或書に見ゆ

外宮神苑　西南は豐受の宮域に沿ひ東北は館、豐川、の市街を限り廣袤大凡壹万五千歩苑中多く植ゆるに松杉の翠蔭たる梅櫻の清艷なるを以てし其の他楊柳あり梧桐あり躑躅あり樅槇あり汪徑羊腸として里の間に通せり中央より南に偏して森あり茜の神社を祭る森を繞りて池を穿てり大さ凡一千四百歩之を勾玉の池と云ふ形狀に因りて名くるなり　光景の清幽なる風趣の閑雅なる遠く凡俗を脱して神苑の名に適應せりと謂ふべし

岡本町　一の鳥居より豐川町に出で神苑を右手に見て此の町にかかる（神苑の内より出抜る道あり）中に裁判所、警察署、電信分局、神風講社等あり商家鬻を交へて榮え車馬の通行自ら繁し　此の町の北隣を岩淵町と云ふ度會郡役所の在る所なり）町の南部を宮崎（或は豐宮崎）と稱す西方に高倉山を負ひ前は田園を控へて皷ヶ岳に面し東方遥に神路朝熊の諸山を望む而して

八幡山

宮崎文庫

御尾根櫻

小田橋

錦ノ小川横さまに野に通せり以て其の眺望の佳なるを知るべし

八幡山は近く東南に見ゆ山高からずと雖もこれに登れば眼下に宇治山田の市街を見るべく又遥に伊勢の海の渺茫たるを望むべくして風光亦愛すべし

宮崎文庫（慶安元年の建築なり）は有志者數名の共有に屬し今尚存せり納むる所の珍書古籍其の數幾卷なるを知らず從覽を請ふ者には之を許すといふ。御屋根櫻は其の境内に在り幾樹の白櫻春に至れば爛熳たり（按するに勢陽雜記に文庫落成の時度會延佳の屋上に一の寸苗を生せしを延佳此にうつして終に高さ二丈餘み五尺斗に繁茂しけるまことに延佳は文庫造立の棟梁なれば大其の美を顯はす好文木の瑞ともいへりしかるに百年の余を經て朽折れ今は既を生せり云々と書せり今の櫻樹は外より移し植ゑしものなれども俗仍古名を傳ふるならんか）

小田の橋は町の東端にして尾上町に渡る橋名なり川を御贄川といふ鼓ヶ岳より發源し北流して河崎町（宇治山田の内にして商業繁盛人烟稠密の地なり）を

過ぎ神社港に注ぐ

尾上町　尾上町　元と妙見町と呼べり好旅舍數多あり家屋器皿清潔にして高尚。料理鹽梅優美にして珍味多し。町の左側に有名なる万金丹を鬻く樂舗あり其の他奇麗なる商店建ち並びて賑はし。尾部の社は町の中央左傍に在り聞説倭姫の命を祭れるものなりと。尾部坂は元と間の山と稱しを杉を玉の小屋の建ち列なりし坂路なり今は僅に一軒の見世物小屋を設けて舊跡を存せり

尾都社
間ノ山

倭町　倭町　尾部坂を上り古市町に至る迄の町にしてすし店數多軒を交たり町の北に琴平神社あり毎月十日を例祭とすこの日此に參詣する男女其の數夥しく往來頗る雜沓す俗呼て十日の金毘羅參りと云

琴平神社

古市　古市町　一に長峰と稱す娼館酒楼參差相接し旅舍あり劇場ありて其の南勢隨一の樂土たることは能く人の知る所なり語を寄す他鄉の士又戒む土着の人此に遊蕩し玆に散財し動もすれは身と誤り產を破るの汚行を爲し以て神都の尊稱を傷ること無からんことを

劇場　劇場は町の中程右側にあり明治廿二年之を新築し大に構造を改良し以て壯觀と便利とを致せり但別に土着の俳優とては無く時々大坂名古屋等より之を招きて興行するなり町の南端なる左傍に臼女の神社あり毎年八月例祭を行ふ此の間其の會式を見物せんとて宇治山田の町々よりこゝに群集するもの其の數幾千万なるを知らす會式は十四日に始り十六日に終る其の体裁一何といふに各妓樓より娼妓數名宛を出し之に歌舞伎の份裝をなし屋臺の上に起坐せしめ三味太鼓等にて囃し立てながら町中を舁き歩行くものにて猶人形を見るに似たり之を俗に子リといふ昔し盂蘭盆といひたりしを今は祭禮に代へたるなり

臼女神社

盂蘭盆

桂木屋　桂木屋は古市町にあり内外両宮の中央にして參拜の人に取りて尤も便利なれば行客の宿泊を求むるもの多し

両口屋

津ノ國屋

西野文太郎投宿ス

中ノ町

葛籠石

蓮臺寺柿

両口屋は古市町中最も舊き旅店なり両口とは扨ても面白き名かな一度聞きては亦忘れぬなり内宮外宮の中央なれば賽客宿りを求め玉へかし

旅店津の國屋は古市町にあり近年の開業にして尤も商賣上に勉強をなせり去る明治廿二年一月六日刺客西野文太郎が大廟參拜の節宿を此の屋に投せしより同人の自筆等今尚當家に殘りあれば千島の興より九州の端より來る所の賽客が爭ひて此の家に宿を求むるに至り大に名聲を四方に轟かして繁榮を來せりといふ

中の町　古市町の次なる市街にして元と中の地藏といへり人家櫛比すれども古市町の繁華に及ばざること遠し。町の東傍なるお岩の世古より二丁ばかり裏手の小山に葛籠石と呼ぶ奇石あり高八尺餘横二丈許石重なりてつづらの形を爲せり。西郊に下ること三丁ばかりにして蓮臺寺村あり柿樹數百株を植え大きくして美味なる

油屋清榮門

柿を出す之を蓮臺寺柿と稱へ勢州人の珍重するところなり

油屋といふ大きな旅店。旅店仲間の飛入新米の親玉にて。我れこそは神都第一の大ホテルにて候ふと。言わぬ許りの店構へ廉屋十五の古株も後に瞠若するのが責めてもの藝。されども禍福は定住するものにあらず世事何事か塞翁の馬ならざらん看よ油屋が其昔しまだいまはしき娼舘にてありける時お紺貢の騒動でいやな譚のありしが。其事却て世人の好奇心を惹起して。二人が情死のお蔭て油屋の名が諸邦に鳴り渡りしも其の的例ゞかしさて其の鳴り渡つて居た娼舘を。今の主人が斷然と廢止して今度は旅店と出直した御手際感心〳〵轉業早々小松宮殿下有栖川宮殿下など雲上の方樣の御休泊所となりし由にて當家繁昌間違なき吉祥善事ゞかししかし餘り威勢かゝら過ぎると上にはよいが中以下が鳥渡馬が合ひ兼ねる。其處が禍福の伏する所。當家の紋は九枚笹其の笹の葉が茂る程

旅店大安

吸遠樓

枝か頭を下げる如く何でも早下するが商賣の秘法。油屋主人の得意の手段。扨てこそ此の屋体骨は動かぬなり

大の目標高く軒端に懸るは古市町にて其の名も四方に輝ける旅館大安にして客人の取扱ひ殊に叮嚀なるは記者が實驗する所なり

當家は數多き客室皆飾り付け美事にして清潔なり且數項の田園を隔てて此の地に有名なる桃山に對するが故に春陽盛花の項には菜花の黄氈を直下に見參差起伏青々たる群岳の半腹に林を爲せる櫻桃が色を競ふてこびを求むるが如く夏は滿山蒼々自から清風を起し來りて清涼室を滿たし秋は雜草葉を染めてさながら錦の如く若し夫れ寒候雪を降すに當りては嵯峨たる銀塊突兀前に當り硝窗を通じて直ちに室裡に晩ず四時の風景妙絶奇絶眞に天然の美を萃めて之れを一樓に有すと謂ふべし

神都割烹家にして樓閣の宏壯なる眺望の美絶なる卽ち麻吉を以て指を第一に屈す蓋し營業數代を累ねて規模頗る大なり其懸崖の結構寄陽花月樓に似たるを以て清人錢少虎天南第一樓、花月樓の稱を送る又王元珍洋翠閣の三大篆を寄贈す實に此家の光榮也其吸遠樓櫻雲閣雪香亭白雲亭一檐紅等の如き各景趣を異にして朝熊神路の峻峰は東南に巍立し貝吹松尾の岡巒は西北に起伏し葛籠石月讀森玉孫池の古蹟其間に散在す況や櫻楓松竹前庭後園を粧點し四時の美觀詩畫の能く形狀する所に非らす仍て古昔より大廟に參拜する文人墨士此樓に登らさるを以て憾とするに至る近く旅館を兼業して一層割烹を清鮮にし雅俗の口に適すと云ふ劉石秋曾て詩あり

三都誇勝人多少上否天南第一樓を以て此樓の一班を知るへし

櫻木町

櫻木町　中の町の次なる町にして別に記すに足るものなしこゝを行過くれば坂路あり牛谷坂といふ昔時は此をも間の山と稱へてお杉か玉の小屋道の両側に建並びたる所なり

の書籍を納めたる處なり

すし久　すし久は有名なる仕度所なり料理飲食宿泊の業を兼ねて營む所にして用ゆる魚類の新鮮なると割烹の巧妙にして價格の非常に低廉なるとは群客の夙とに賛賞する所なり唯然るのみならず需めに應ずるの速にして顧客をして寸時も空しくせしめざるは所謂卽席料理の名に負かず此の点に於ても恐らくは全業者中の第一なるべし

角屋　宇治橋畔に有名なる旅人宿角屋あり　は五十鈴川の清流に臨み對岸は神苑に對して青松櫻樹を駢べ植へ堤に笑ふ萩の花何れも花時の風景絶佳なり宇治橋上織るが如きの行人が拋つ錢を橋下より網もて受くる妙技をば眼前咫尺に望むべく橋の彼方は子安山東の方には畏くも太神宮の御山を望み檜皮の屋根の神司廳西の方の丸山は近く窓前に當りて神苑に屬し盛に植ゆる滿山の櫻樹は一目千本の名も後來に空しからざらん掇て亦西の窓より見渡せば山の中腹

浦田町　牛谷坂を下りたるさ一入りの町にして是より人皆宇治と呼ぶ蓋宇治とは古市町以南の惣名なれど其の間人家の聯續せる處あるを以て斯くは言い習はせしなり内に猿田彦神社神宮教院（神道晋及の事を司る）皇學館（教養する所）等あり

猿田彦神宮教

皇學館

中ノ切町　浦田町に連りたる市街なり内に神宮司廳（両宮に係る切の事務を取扱ふ本廳なり）大麻局（両宮の神符を製造する所）製暦局（日本全國に配布する暦は此の局にて製する也）あり。町の東郊一出づること數丁にして西行谷あり其の昔西行法師の住ひし寺院の在りし遺跡にして山水の風光亦觀るべし

中ノ切町

神宮司廳

大麻局

製暦局

西行谷

今在家　芋洗ふ女西行ならは歌よまん　はせを

今在家町　宇治山田町最南の市街にして道の両側に參宮人の土産物を商ふ店數多あり旅客の通行を認むる毎に可笑しき聲て之を呼ぶ其の樣態しむべし。町の南端より西に依れる小高き丘の上に林崎文庫と云ふあり宮崎文庫と合せ稱へて両文庫と云へり是亦多く

今在家

林崎文庫

五十鈴川

大瀧

鏡石
三ッ石
碁盤石
鮑石

に有名なる林崎文庫を望むべし凡そ當國風景の美は言ふも更なり帝國の人民が其の卿土にありて遙かに太廟の方を伏し拜みてさへ最と有がたしと思ふなるを當家に止宿すれば座して神宮の御山を朝夕咫尺の間に觀拜するを得るこそ世に忝き事にあらずや況んや其の接待叮嚀に割烹甘美に價格低廉なるに於てをや

五十鈴川　又宇治川と稱す（御裳濯川とは其の小名にして橋より上流をいふもの也との說あり信ずべきか）源を志摩國英虞郡惠利原村の山中より發し神路山の諸溪水を合せ宇治を流れて鹿海村に至り朝熊川を受け沙合より分派し一は二見の浦より一は今一色村より伊勢の海に入る。上流に瀑布あり大瀧といふ高さ五丈餘巉巖絶壁の間に落つ其の狀宛ら白布を晒すがごとし又鏡岩といふあり高二丈横五丈許石質淸くして光あり恰も鏡面に向ふか如し故に此の名あり其の他三ッ石。碁盤石。鮑石等の奇石溪間に枕し奔湍之に激して飛沫日を翻す其の風景實に名狀し難き處多し。此の川に架するもの所謂宇治橋にして長さ五十一間餘幅四間余あり橋狀反りて虹の如く中間水面を拔くこと二丈許なり。橋の前後に巨大なる鳥居あり。俗之を両鳥居と稱ふ此の橋古へは十町餘り下流に在りて板橋の類なりしを永享三年足利將軍義教參宮の時今の如く堅牢廣大なるものを架せしなりと云ふ

宇治橋

新古今集

君が代は久しかるべし度會やみもすそ川の流れ絶せず

匡房

一、鳥居

一の鳥居　御宮の入口なる鳥居を云ふ外宮一の鳥居より四十三町半ありこの鳥居を越ゑ右傍に下り五十鈴川にて手水を遣いて參詣することなり

内宮

内宮　天照皇大神宮。又五十鈴の宮と稱す。我國帝室の太廟たることは何人も能く知了する所なり。抑此の大神は神武天皇以

別宮

來。代々帝室の内に祀らせ給いしを人皇十代崇神天皇六年九月。大和國笠縫の邑に崇め祭られ玉ひ。後十一代垂仁天皇の御宇。三十六年十月に至り。今の五十鈴川上に御遷座ましませしなり。其の宮域たる神路山鬱々東南を擁し。五十鈴川淙々西方を限り古杉老檜至る處に千歳の色を帶べり。之を外宮々域に比ぶれば。更に幽遠にして壯嚴なるものの如し

新古今集

神風や五十鈴の川の宮柱幾千代すめと建てはじめけむ　　俊成

玉鉾百首

たなつもの百の草木も天照す日の大神の惠み得てこそ　　宣長

別宮七所　荒祭ノ宮。風日祈ノ宮は各宮中にあり

荒祭ノ宮
風日祈ノ宮
月讀荒御魂宮
伊弉諾宮
伊弉冊宮

月讀ノ宮。月讀荒御魂ノ宮。伊弉諾ノ宮。伊弉冊ノ宮。は本宮より北の方十八丁中村の里にあり

瀧原宮
伊雜宮

瀧ノ原ノ宮。瀧原並ノ宮は本宮を距ること西南十里半なる野尻村にあり

伊雜ノ宮は本宮より東南三里志摩國磯部村にあり

此の他御供所。御神樂所。大麻授與所等の宮中に建て設けあること外宮に異ならず

内宮神苑

廣サ一万歩

内宮神苑　東南宮域に接し西北五十鈴川に沿ひ廣さ大凡一万歩。苑の構造及び植うる所の花卉草木等外宮神苑と大同小異なり。蓋し外宮神苑は人造の景に富み内宮神苑は天然の趣に得る所あり。其の廣狹優劣の如きは敢て論ずべきにあらず

神苑ノ起因

抑両宮神苑の事たる工を明治廿年一月に起し。仝廿二年十二月に至りて畧落成せり。其の費す所の金額殆數万圓なりと云ふ。是れ

より先き土地の有志者相謀りて。神苑會なるものを興し。宇治山田町を始めとして。諸國官民の寄附金を募り。以て此の工事に着手せしが。中途にして宮内省の參する處となり。貴顯紳士の總理贊助あるに及びて。其幾頗る鞏固となり。遂に此の盛大なる耳結果を見るに至りしなり。而して該事業たる未だ全く落成せしにあらず。聞く今后の計畫は。古市町の東北半里許に位せる。倉田山を開き。天然の風光に添ふるに人工の景物を以てし。或は歴史博物館を建設し。或は古今の忠烈正義。以て國家に大勲偉功ありし名士哲人の肖像を鑄造して。之れを苑中に配置し。茲に帝國の一大公園を創造するにありと。而して苑の廣さ無慮二十一万三千歩なりと云ふ。以て其の規模の宏大なるを推知すべきなり

今后ノ計畫

苑の廣さ廿一万三千歩

二見浦

宇治山田ヨリ東北二里

海水浴場
寶日館

宇治山田ヨリ二見ニ至ル道路

二見浦

二見浦は又清き渚、雙鑑浦と名あり宇治山田町を距る東北二里許前は伊勢の海の渺漠に面し後は音無山の翠微を帶ぶ而して連波寄する所白砂尚白く淡靄籠むる時青松青きを添ふ其風光の清且奇なる筆紙の能く尽すべきにあらず殊に奇巖の海中に雙立する處を絶景と稱す

櫻貝拾ぬ二見の海士人は袖ゐも濕の花や散るらん

度會弘訓

海濱に海水浴場あり又寶日館あり此の樓上より登臨すれば富嶽、白根山、白山、御嶽よつて近國の諸山に至るまで海中に浮ぶが如く一望百里人の心目をしく寛からしむ此の樓閣は明治二十一年三月皇太后宮行啓ゆられ一時行宮の用に充てんが爲め神苑會に於く新設せしものなつて是と同時に御鹽山より志摩鳥羽に至る新道を開き車馬の往來頗る便利なるとなれり。宇治山田町より此の地に至るには河

旅店

崎（外宮より東北二十町）は五十鈴川の下流の分派する所にして潮汐の落合ぬ所なるを以て此名あり又内宮新苑の一隅より山道を越へ中村、楠部、鹿海の村々を經てさゝに出る間道あり）山田ヶ原村、三津村を過ぎ茶屋町（清潔なる旅舍數軒あり天氣よくばこゝに一泊し未明に海邊に出で旭日を拜することなり）ゆかゝりて出つるなり

白砂青松相映じ漣（さゝなみ）清渚を洗ふは實ゆ二見ヶ浦の景とす其の美縣下に最さり苟も大廟に參拜するもの誰れか此の地を踏まざるものあらん殊に先年　皇太后陛下御駐輦の際神苑別區として賓日館を新築し道路を改修す爾來行客の足を止ゞるものいや增すと云ふ當地の旅店には中井屋、角屋、松坂屋、清渚亭等あり何れも皆修潔美麗にして接遇丁寧なり此頃中井屋、角屋は主人發起となり當地旅店共同して共立汽船會社代理店、共同汽船會社は支店を當地に設け當地より直に纜を解くと云ふ（風の摸樣によりて今一色村より出船す今一色村は當地を距る十八丁の所にあり）行客の爲め以便益を與ふる實に大なりと云ふべし清渚

汽船會社

海水浴場

朝熊山

宇治山田ヨリ東北三里

勝峯山
金剛證寺
富士見臺

萬金丹ノ由來

亭には海水浴場の設けありといふ

朝熊山

朝熊山は伊勢志摩の界に跨れる高嶺にして宇治山田町より東方三里許に在り山海の風景十八州を眼中ゆ聚む頂上ゆ勝峯山金剛證寺あり虛空藏を安ず中興東岳禪師の開起に係り堂宇壯觀なり惜むらくは明治廿一年中火災の爲に頗る荒涼を致せしとを。奥の院に富士見臺あり呑海菴と稱す

海を呑む茶の子の餅や富士の雪　一休

山上に有名なる萬金丹を鬻ぐ藥舗及び恰好なる旅亭あり。この山ゆ登るには古市町の中央より東に折れて久世戸に入り楠部峠を越え一宇田村、朝熊村を經てゝに至る又別ゆ宇治より山道を通り楠部村に至る間道あり

有名なる萬金丹の製造本舗野間氏い源家の庶流（しょりう）にして五百有余年

神社港

宇治山田ヨリ北方一里

連綿たる舊家なり抑も此の名藥萬金丹い祖先德翁が木尊の靈夢感得の修製にて濟世救民の爲め數代の間施藥して家に秘したりしを拾三世宜繁翁が當時の長老に謀り元祿年間恐くも勅許を蒙りて賣藥となし恐れ多くも毎歲禁中及び親王方へ献上奉り爾來功驗著名なるを以て當山の名産となり日本萬金丹の元祖にして海内に普く知らるゝ最とも貴き靈方あり

神社港

神社港は宇治山田町を距る北方一里許に在る埠頭にして水深からざれども地勢風浪を避くるに宜し故に參、尾、志、紀諸州より船舶れ出入すること絶ねすして人烟自ら稠密ふ市街隨つて繁昌と致せり此ふ汽船共同會社あり賞崎、四日市、尾州熱田に通ふ汽船の投錨歸港日々絶ねず

神都に就て

二

神都に就て

朝熊岳の峯い高く瑞雲の際に峙ち豐宮川の流は長く五彩の波紋添へ佩玉鏘々の音は清くして五鈴の水に響き旭日閃々の光と明らふ且つて雙鑑乃浦を射る是れ此土の遠く古代ふ著はれ今代に名ある所にして江月の明瀟林泉の清秀千歲歷然として心目を洗ふが如し「何の木の花ともしらす匂ひ哉」何人も此地に來り此景ふ觸れ此境に接せば心霸然と去て樂そべを身蘇然として敬せざるなし

謹みて國史を按するに　天祖實に御偉德あり六合に照臨玄給ふ嘗て皇孫を召させ勅して宣はく豐葦原の瑞穗の國は朕が子孫の王たるべき地なり爾皇孫就きて之れを治めよ寶祚の隆ゑる天壤と窮りなかるべしと又天璽の寶鏡を取りて宣はく朕が兒寶鏡を見ること猶朕を視るが如くすべしと茲に於て列聖皇孫　天祖の隆緒を繼ぎ皇國を治めし寶鏡を恭敬し給ふ茲に　垂仁天皇の御宇　天璽を宇治五十鈴の

川上に鎮め奉らば天下億兆之れを敬崇奉給ふ今の皇大神宮之れなり紀四百八十二年と經雄略天皇の御宇豊受大神を丹波真名井原より度會郡山田原ゝ遷祀殆られ社稷の神とし世々皇大神宮と共ゝ祭祀を執られ衆庶と之れを尊崇し給ひければ此の二大神宮は永々皇祖の皇統を衛護し豐葦原の皇國をして悠久無窮天壤と限りなく彌富ゝ富み榮へて萬々歳に其皇基を冥守し給ふ皇國の臣民たるもの誰れか欽仰恭敬せざるもれあらんや

我宇治山田は辱くも二大神宮の鎮座あら殆らるゝ所にして乾坤之れが爲めに澄み山川之れが爲めに鬱々たり市街の地東西に長く南北に短く中央少しく丘陵をなす間の山の稱今に存す古昔險坂の路にして行旅之れを艱苦今の甍軒を並べ人謳歌して過ぐるものは宇治の僧月仙の恩賜なり東南一帶神路山、鼓ヵ岳、高倉山の諸山連り境域幽森にして清美愛すべく其秋風黄落の節には「枯枝に烏のとまりけり秋の

暮」の趣を存し西北は沃野延縁して青畝地に敷き柳暗花明の村落其間に散在し里々擊つ磯の響、早苗とる乙女の唱歌聲亦聞くべし海を距る遠きもの二里近きもの一里北方の極邊は謂ふ所伊勢の海なり古史記す所によれば宇治は内と稱し山田は陽田又(ひなた)と訓せり當時山間田野の一部落にして人烟れ稀少なる起居眠食の狀態亦察すべきのみ思ふに神宮遷祀以來人來り我行き交通頻りに漸漸戸口の繁殖を來たせるものなるべし中世山田奉行を置くや四方數里の地を併せて神領一に天領と唱へ皆其治下に屬す晩近度會府を吾淵町に置き後改めて縣と稱し又廢して今三重縣治に歸す時に盛衰あり運に消長ありと雖ども世の變遷と共もに人事の多忙と來さし隨つて文物益々改良す殊に神都は維新以前道路險惡交通不便の時代ゝ於て所謂師職代官の輩毎年神札を奉じて他國に出で或者と風羽の山水を眺め或者は越路の大雪に艱み或者は東海の驛に馬を馳せ或者は南海の名勝を

探り或者は中國に到り或者は筑紫に到り南船北馬全國到る處神都人の足跡を絶たず從ふて風俗の優、文物の美、見聞度を重ね不知不識感化せられて民俗に幾分の光輝を添へたるは疑ふべきにあらず美術の思想は山河襟帶林泉明眉自然の境遇より存養せられ從來畫人、詩人、歌人、俳諧師等の出づる固より其處なり人民は快活にして能く客を遇し風流の中氣骨を存して文明進歩の思想あり生業は商賈其半を占め農工之れに次ぐ行旅往還の地櫛比の人家雜物、雜貨を販ぐ紙烟草袋、櫛笄、黄楊櫛、漆櫛、笛、石張皮籠等は伊勢の土産最も携帶に便なれば旅人の爭ふて購ぬ所春慶塗漆器は其質美にして合羽、傘其用久しきに堪ゆ街衢所々に高門長宇を構へ壯觀を呈ぜるもの今多くは廢滅に就き僅に其二三を存するのみ即ち神宮師職の邸宅なる者是れなり山田奉行を近郊小林邑に置き神宮の事を司らしむるや家運最も隆盛を極めたり神社佛閣亦た尠なからず結構爽潔にして古代質朴なる

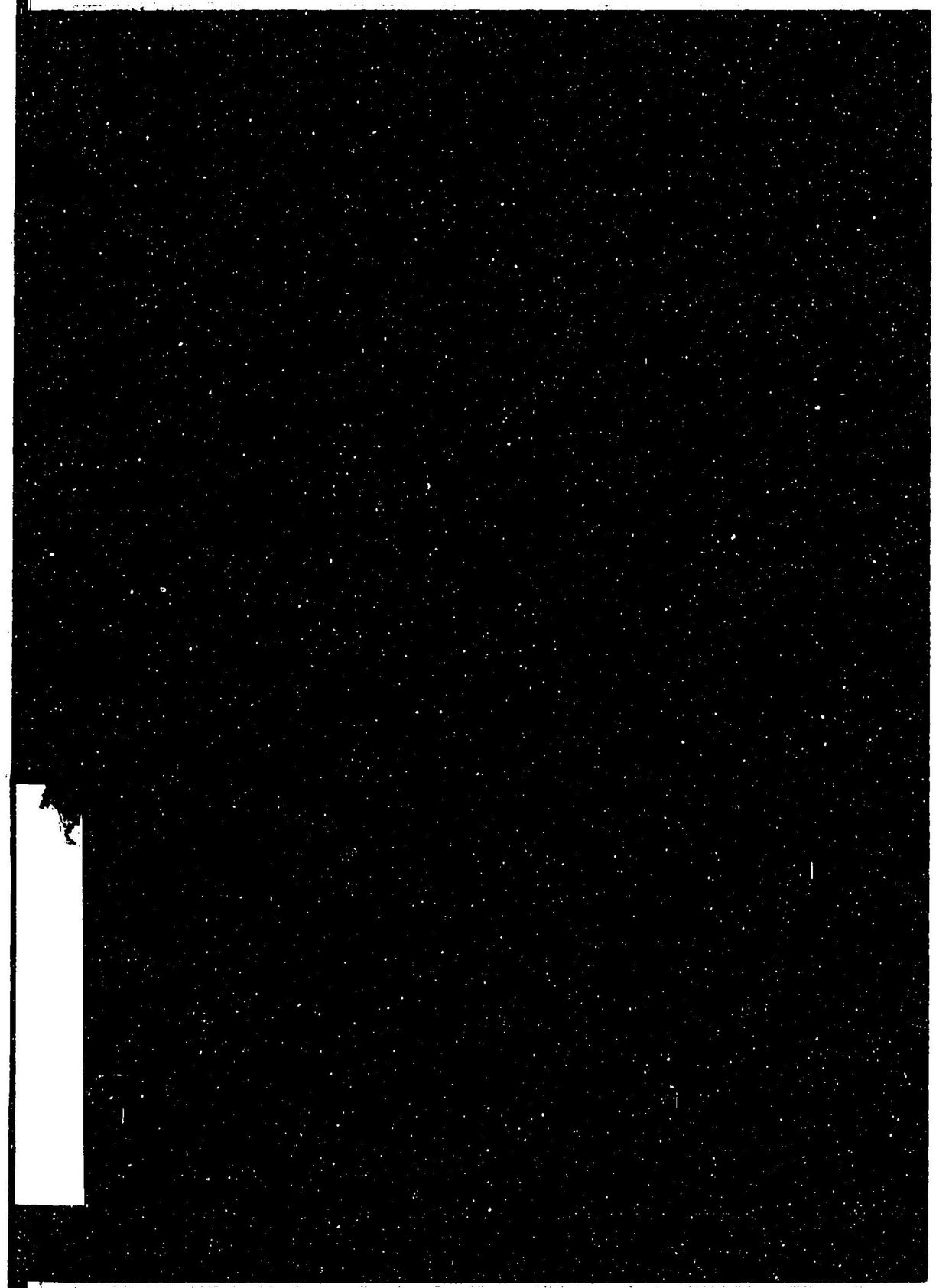
風俗を示せしに王政以來百般の事物改革と共ゝ佛徒疑心を抱き此際寺院多く減少す

此地歳豐かに風雨順に至り天災地變草木乃妖なく南畝北田累々穰々として禾穀家棟に滿たず老となく少となく男となく女となく道路の遠近なく蜂市蝶集花の神都に來る故に亦旅亭多き毎歳春夏の候に到れば平年と雖ども神宮參詣出入の人員日に一萬人以上に登る魚介新鮮にして多類、鱉肉、乳汁、珈琲、洋酒の類得難しと爲さず菓果旨ふして且つ多し眠食の安きと來遊の快味は考古學者と美術學士を問はず貴となく賤となく來りて此都に入るときは數日倦むと知らざるべし或る英人嘗て伊勢に來り人家櫛比土地清淨なると見て山田驛の如きは歐州「スウイツル」國以入るが如き思をなせりと蓋し又中らずと雖とも遠からざらん

人口二万四千六百四十九人戸數五千六百廿八戸あり（明治廿二年末

調）伊勢街道の極所として繁盛の區なり思ふに今より以後皇國一大神苑の事業擧がり伊勢街道參宮鉄道の落成を見るに至らば滿天下億兆の人來りて抃舞歡呼し宮域に入り彼れも壯觀、此れも偉觀、轉た皇國の無窮を祝し畏くも我　至聖至明かる　明治天皇陛下が皇祖を崇敬させ給ふの聖謨に副ひ神威を發揚し國威を四表に光被し以て益々天祖冥護の神德に酬ひ以て愈々昭代雍熙の恩澤に荅ふべき郷り嗚呼亦偉ならずや

明治二十三年四月十日印刷
仝二十三年四月十一日出版
（定價金拾錢）
三重縣津市大字大門町六十二番屋敷
發行人　河島九右衛門
仝縣津市大字伊豫町八十三番屋敷
著者　井澤武
仝縣津市大字岩田町七番屋敷
印刷人　竹嶋定吉
津市大字大門町
發賣所　川島文化堂



特20
245

伊勢みやげ旅寝之友

国立国会図書館

025184-000-5

特20-245

伊勢みやげ旅寝之友

井沢　武／著

M23

ADC-2578